たゝきま

二

哥を名とをつと

Murasaki Shikibu [v.2]

[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol.2
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

源氏十六戈

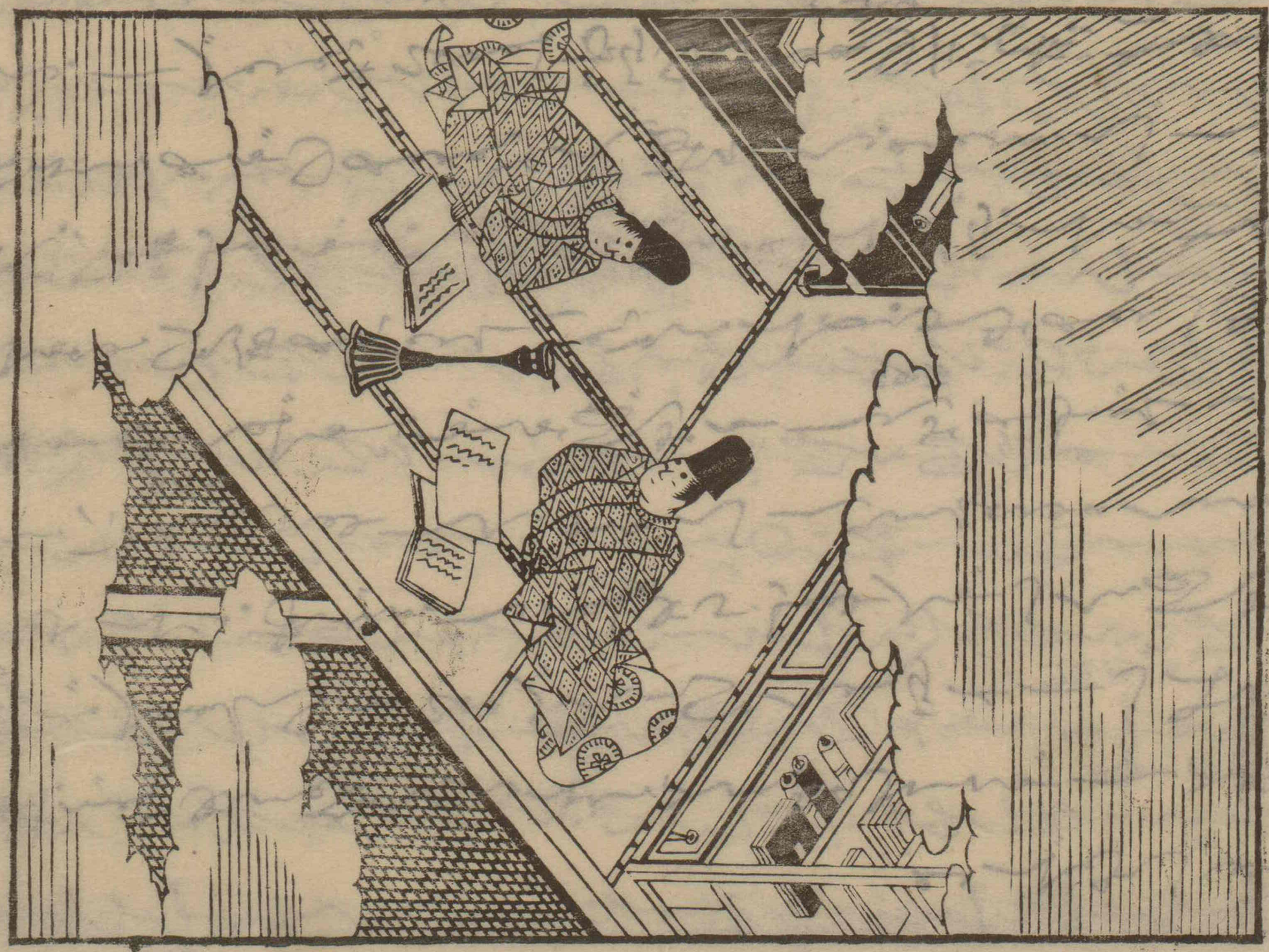
ひかる源氏（ぐんじ）たれそてとくしたりいひそれのふと
かおほかるまいとぐ（中イ）かうすきごとぐもをすゑ
の世にもきつゝへそかろびしる名（な）をやなが
さんと思（しの）びまけるくろへごとをさへかうつ
こへけん人のおいひさがなさよさらはいといくく
よ代いぐりまめぐらのけるゆ程（かど）なよびなおし
きことはなくてかるのかゝ将（せうしやう）にはわらはれしまひ
けりしまぐ中将（ちうじやう）なよどよもれしのし時をうち
まのこさふしひようしのしてお（た大臣）ほいとのにはしえ
ぐまうでなをしのぶのうぐれやとうるがひ罪（さこ）ゆう
こともなりしりどさしもつぐめきめなれしる

うちつけのすきぐしさしれどはこれまりしらぬ此
本上(ゆんじやう)まてぎれは此かがらよひきたがへ心げらし
なりしとを此心(ミ)はおぼしとゞむるくせなんあや
まくまてざるまじきれぬまひもうちまじ里
けがなが夏(五月之)(あめ)ちれまるきころ内(うち)のれもれいとさしつゞ
きそいとゞながぬさふひのをおほ(光太后)とれはおほ
つるくうしめしくおぼしれどよろげの御
よそひなるくれとめづらしきき夜まそうじいで
ゐひつれむすれ来ざらこれれとのゐ前(どころ)の
宮(ミヤ)づへをつとめのふ宮がらの中(フス)ねはなりまさうし
くなれきてのそしけるくびしこそれともひと

ようハ心やすくなれくしくふるまひたり。右(三ぎ)乃
おとゞのいたりしづきのすゑは。これ(以中将と同君とこ)をみも
いとおうらしてすさがましきほどゞ人なり。さとにて
も我(まづ)なるのしつひまぐゆくしそ。君(源氏)の出(ぞ)へし給(まま)
まうらつれ罪(さこ)もつくりまゐるべくもんともなりて、
びをももろともにしておるく立をくれず。
いづくまでもまいれ罪(さこ)ものほどまをれづくし
こまりもとゞ心のうちにおもふことをもらく
しけへずるんむつれきこしまけるつれづくと
かりくらしてしめやうるよひの夜に夜上(てんじゃう)にも
おさく人ずくなまれとれ如前もれいよりハのど

やうなる心ちするまおほとなかぶらちくて・ふみ（学文）ども
などこゝのつゐでまちうきこゝげしなるゑのみ
なるふこ（麓出）どもをひきいでゝ・中（仄）将わりなくゆし
がれば・さり（源氏詞）ぬべきすくしハこをんがる且なるべきも
こそとゆるし竹ハ日ぐ・それ（仄中和詞）うちとけてうるハら
いたしとおぼされむこそゆるしそれをしなべきか
おほるのハかずなるねど・ほどくまつけちかきか
そしつてもみ侍りなんものがぢてうしめしきおり
くゝまちがれなるんゆ（虫）ぐれ・蒼なるどれとそこ前ハ何ら
めとゑむずれば・やむごとなくせちまうしのべき
などしかやうまおほぞうなるこゝげしなどまうり

きさらしのべくもなのずかしくとききぬべ
あれば品は二のまち(次ノ町也)の中すさまじくなるべし。う
りづらうくさばくなまものどもこそ給
それとて心はそこそれかれなど子中にげひ
あつまもあらむもてこなれしさも思ひのまゝて
うざふもお(源氏心)りしとおぼをども。ずくるまて
とくまゐぎさゝしつとらくしのつ。(源氏詞)ゞくにこそ
おほくつどくのふらめ。すゝしきや。さてゐまん
これづしも心まくひくべきしのつまへだし。けれ(以下中将詞)
給んじどころあんまそうて給しあなど。見え
まつあでま



もとより志なさるめは中務詞第一帖

めのこれハ志ましくなんつくまじきハうこくも
あるかれとやうくなんえんへ志るだゞうこんぐ
だらけなるさけまてハしつ（筆出）ぎがきおりるし
のいふ心えてうらしなどばかりハずいぶむま
よろ志きもお目かりとこのまふれどそもまこと
まそれかるをとりいでむえしひまかるすもう
まじきはいとうる志や我（ヨ）が心えたることぐらう
ををのがぎく心をやすてく人をバおとしめなど
りるいらいるきこしお目かりおやなどたちそひ
もてつのがめておひされこもれるまど此中（うち）なるかど
くだぐるるどをこさ法るへてこころをうごう

未摘二首

さしともあめりかうちおしくうちおほどき
わやかうそ・ぶらくてとるき程（かど）ぐれきすき
ひとも人まゐる心をいまてともあるまゐどのづら
ひとりゆへづきて・志いたることもつり・みる人を
くれたるゝとばいひくし・さてつりぬべきゝる
とばつくろひてまゐ・びぬ出（いで）さるまゐ・それしかあしじと・
そしまいぐしとしくり思ひくぶさむ・まうこと
りとみもて以まみをとりとぬやうはなくるん
あるべきとうめきたるそしきもくげりしげな
れば・いと（源氏心）なべてはあらねど・我（れ）も覚（おぼ）しつのはすることや
あらんうちほゝ思ふて・ぞれ（二品源氏詞）ゝかゝるゝどもなまきひとゝは

あらんやとのゝへバいとさいりなるらんこのうちは
三語以中物詞
催(れ)はすりされより侍らん。とゝるなく口(ゟ)おしき
きはと。いうなりとおぼゆぐりすぐれたるとは。
かずひとしくこそ侍らめ。人(上ノ恐)の志れまくむまれ
ぬれバ。人にまもてうしづれて。うくることもおほく。
志のんにそれけれひとしなりべし。中(なり)れ志るま
なん。人の心ぐ。その志のくそこるをもむきも
えて。わりべきことゝぐおほかるべき。しもも
のきざことといふきゝなれバことにみくしてず
しとて。いと(源氏心)ゝ夜なげるゝ氣(けしき)多なるもゆかしくて。
四語源氏詞
それ志れぐやいるゝいづれを三(こう)の志れにをき

てゝわくべきにもとれ志れたくむまれるべしも身ハ
志げミくゝねミじゝくて人げるき文なを父のうむ
ごちめなどまでなりの御りたる我が御まで家のうち
をかぐり人をとゝじとおもへるそれけぢ先をぐ
いぐわくべきとひゆゑ行ゑ左のるのゝみ夜式
アのをうれもれいうまこもんとてまいれり世
のすきもれまてものよくいひとをれるを中将
まちとりてこれ志れぐをわきまへさぐめあり
そふいとまくまくきことおほりなりのがれども
もとよりさるべきすぢなしめに世人のおもへなこ
ともさはいへどなをことなりまゝしもとさやしんづと

光より十八向巻第一陽子以詞 惟光女ニ尚

未摘ニ尚

なきすぢなれど世まゐりしつぎすくなく時世(ときよ)は
うけろひてるおぼしおとろへぬれば心もこゝ絶とし
てことたしぎ。ほろびしることぞ出(いで)くるわざれ
めれば。とりぐくことそりて中(なか)のしなまぞをく
べきずるもやうといひてる。人のくるれことまうづら
ひいとるまゝて志れさぶまりたる中にも。まるこまぶみ
くあて中(なか)れ志れのぞしうハあらぬえり出川
べきよろ月ひなりなまくのんぶちめりも。非(ひ)
条後(まんぎ)の四位(ね)どものよれ(的石ニ尚)おほしくちおしうぎ。もと
のみぎしいやしうしぬがやすらる身をもてなし
ぬまのひしる。いとかぶしうるりや家(いへ)のうちまゝ

ぬことなどぞたるなるめるまくまはぶりずまぐ様き
まぐもてかしづき御むすめなどれおとしめぐらく
おひ出るもつまるあるべし。文づへ（相臺更衣ニ尚）はいでしたちて。
さひかけぬさいたいとりいづるあしどもおほかり
しなどいへばすべ（源司二段）るまぐはしきまよるべき
なるりとてわひのをこと（以中司）人のいたんやうは心えず
おほをるくとて中ねまくむ。もとれし（三段写以司）月（女三文ニ尚）時代（とさよ）乃
おほうちはひやんごとるきあるりのうらくの
もてなしをたひをくれたるんはたらまもいたずな
まをしてかくおひ出けんといふひるくおぼゆ
べしうちあひてすぐれたるんもことゆりこれこそ（蒲雲ニ尚）

くまるべきことにおぼしてめづらかなりことに心も
おどろくまじかなるまじかなりぶべき程(かど)なりしが
うしがかしこまうちをき給ぬ。さて世(夕顔ニ当)にありと人は
しられずさびしくなりぬれさんむぐらの門(かど)はさひ
のほかまらうしげなるんへのさぢられたるんこそ
かぎりなくかんづらしくはおぼ給ぬ。いかでもとかく
まけんとしふよりしぶへなことなんあやしく
心とまるわざなるぢくのとしおいもれむつりげは
ふとりすぎせうとれかかりくげはおもひやりこと
なることなきものやのうちはいといくせひあがり。
くるくしいでしるとわざもゆへなりぶこし

こんかんどうてもいくせひのほうまおかし
うらざらんすぐれてさずるまきうこのえしひまこそ
とよばざしめさるうこのてすてがこれ物なぐとて
或るとこやれば我いもうとごもれよろしき四九
あるをおもひてのゆふまやとや心うらんもれもい
くずいでやうこれしるとおもふまごまうこげなる
世をと思ハおぼしべししろきれぞどものるよく
うるうるおなしぢりをしどけるくさるしのてひ
もなどもうちすてくそひつしかへれほうげいぐ
めでしくぬすてこしてまつしまかしこれれしある
しかみがかみをえり出てもれあくまじくみて始

さ面ぐの人のうへどもをうりなくせけ。お泪
りこの世につけてみるはとぶるまきもわがものの
とうちこのむべき絵えてもむまお泪から中まも。
えなんさひさぶむまじりけ。おのこれお泪やけは
つふまつりぼがぐ志き世のこと絵なり。笹きも。
まことれうけそもれとなるべきをとりいぐさん
まハるうるべしりしされどうしてもひとり
ふるり世中をまつりぐちしるべきなるねば。
りミハ志もまゝ寸々れ志もハかみまなびきて。こと
ひろきまゆづろふしむ。とぞうき家の内のあるし
とすべき人をとりをとひめぐ寸まこうでありか

べきぞ、ずどもなんりんぐ、おほうかと何れはうつり
あふさきうさまてなれめまさてもありぬべき
人のすくるきをすきぐしき心のすきひまる。
人の何りき夜を何まくこ何れせんのこれこるね
どひとへまおもひさぐむべきよるべとすがりま。
おれじくは我(ほが)ちからいりとしるをしひきつく
ろふべきところなく心まうるふやうしもやとえり
そめつる人のさぐまりがこれなるべしうるずし
もわがおもふまうかたのどゝ見そめつる契(ちぎり)ぞうりを
すてがたくせひとまうる人は我まめやうるりとみて。
さてしもうるくあの(をんな)ゝめもこころまくとしいら

なくなりぬれどなほかの世の行りさ後をこゝろへあ
むらまゝに心にまとぐぐずいとゆかしこさともなしや
まごちれかゝなされえしひまはましていかぐ
かれ人かはこぐひ(らす)のかゝむ。あきくしふのへぬぐまゝる
ちさゝなげるくわかやかるゝ目どのどのがしてハ
ちりもつゞしと身をもてなし。文をかけどお目を
かゝことえりをし。すゝづざ目のかゝ心もとるく
おもはをつゝまゝるさやかゝもそしかなしすべ
なくまゝるせ。わづかるゝ急さくぐらりいひれど
いされしるゝひさいれごとずれなかいとゝく
もてくすぬかり。ゐまゝびかゝ(そんな)めしとゝれバあま

俳諧ノ法息不二当

木枯女二当

をなさけまひさこゝあしれてぞりなきばあぐめく
是をいじめれなんとすべしことが中まなれめる
なまじさひとのうしろこのこゝはものあくれ
しりすぐしゝるきつゐぞのなきけつりおうし
こさますめるゝなくてもよりべしとみて
こるまゝまゝめくしきすぢをこそゝみてく
さみがちまひさうなきいるどうじれひとん
指くひの女二尚
まうちとけこゝろうしろこぐりをして 朝夕 あさ生
の出いりまつけてもおほやけわたくしれ人のこゝ
ずまゐよきおしさしとれめふもみくまもとま
ゆかりさ夜とうとき人まわざとうらまゐばむ

やはらくてこむひとのこさくわさおもひしるべからむまかくりもうくをばやとうちもしまれるぶもさしぐこもしはあやなきおほやけがこそしく心ひとのおもひあまりことなどおほるを。なかくはさうせむとさへばうちそむかれて人しれぬさひいぞるわらひこもきれ衣（あれ）ともうちひとりごちくまなまごとぞなどあらつまさしなふざけしらんはいりぐはおしりしぬこぐひさふまこめうさてやしらるるむ人をとくひさつくろひてるはなどみぎらんこころもとなくともるをし所あるてちすべしげまさしむひてこん

紫上二尚

径(みど)ハさてもらうたさうるまつこゆるしこうべさ
とこちくるれていさうべさことをもいひやり。おり
わしまたいでんわざれあぶことまもまめことまも。
秘(ヨガ)心とおもひうることなくふうきいたりるうらんハ。
いとくちおしくれもしげるさとうや。ぢをくろ
しりらんつね(花散里二番)ハすくしそばくたく心づさなるさ
人のおりつしまつけていでだへするやうもなり
りなどく海るさもれいひもさぶめるそいくく
うらなげくどハ(いま)こゝにたれまもうらじ。うたちをは
さこにもいたじいとくちおしくねぢけがましき
おぼしぶなくハこゝひとへまもれまめやうり。

しけりなり心のをもむきたまへんよるべとぞつねの
これを前にはしひとへかりけるあまりれゆへよし
心ぐへうちそへたるんをもしよろこびにおもひす
こしをくれたるるあるんをもあるぞちにもと
めくはへじうしろやすくのどけき前ごとつくく
もうちべのなさけはとのづからもてつまつべきなぎ
とやえんに抱きちしてうしろいつべきことをも
夕部上ニ尚 又伴勢抱讀ニそくいるんと讀し女ニ尚
こしくぬさ海にしのびこるうへてつれるくみさほつ
くりぶひとけにしひあまりと紀ハいたんかたなく
すぐさ云(こと)の葉(は)あくれるるうるとよみをきしのだ
るべきかるこをとぐめてふきし山里(やまざと)せぐるれしう

うこづくなどまもひくれぬりし。わらはは待し
時。ぬ(ねうだう)などのあがたりよこしをきて。いと衣(あれ)は
るるしく心ゆきことゝるを。浪(なこぶ)をさへなんおとし
侍りし。今(いま)しふまいとりがくしてことさしび
とゝるなり。心ざしゆくんおとをとゝる。
みるめれまへまつらきことゝなりとも。人のこゝろを
こしらぬやうにはげくれて人をまとつし。心をもみ
んとする程(かど)は。るがき世のもれおもひはなる。いと
何ぢきるきことなり。心ゆしやなど困めるてられ
て。何くれすこぬれば。やがてあまはなりぬうし。
心ひたけほどそいと心すめる猶(やう)まて。世まりてりも

すべもおもへず。いでゆかるゝ。うくるこそおば
しなりけるまたなどやうのゆのひまわりひとゝき
こゝろひ。ゑにすましうしとも思ひあるれぬおもこ
こゝろつきて。涙おちをば。つゝむ人あるごとくちなど。恋
のみ心はゆかれなりけりもれを。あかしはれなど
いふばかりつひとこといふこともきこえずりておへなく
こゝろばそくれば。うちひそこめりし。あのがれも涙
こぼれそめぬれば。おりくごとにまえもんじえず。
ふかきこゝろもおぼめきまよばけもなかりく心
ごゝろなしところ給つべし。まことにあのほどよりも
おもまうし。ひまそつはゞりてゆのしこゝろまゝしうず

よひぬべくぞおぼゆ。ゆゑしぬすくをあきりぐで。
あまにもなさぞこぶねとりたらんもやがてそれ
おもひいでうしめしきふしあらぎらんや。何しくも
よくもあひそひて。どあらんおりにもからんき
ざみをも。こすぐしこらん中こそぢぎりふく
何られなるめ。我(それ)も人もうしろめたくろを
かれじやハまるなれめまうしろふるあらんひ
とをうしろて。氣(かしき)色だこそむりんたるをそが
ましりなん。心ハうしろふるなりともみそめ
しぶぎしいとおしくおもはぐさるのよすが
はおもひそくもなりぬべそうまさやうなりしも

さぢろきまゝしぬべきわざなりすべてよ
げのことなぐらりまえんずべきことをばこしれ
紫上ニ尚
さ海まほのめしうしむべからんふしをもまくから
ずみすめなきばそれまつまてあられもまきり
ぬべしおほくハわぶ心もこゝろ人がらおきまりこそ
すべしおまりむげまうらゆかべこゝろちらるも
心やすくらうこきやうなれどそれづらかろきか
こまぞおほし給ふしつるぞぬふねのうきしる
こゝろしもげまあやなしさハ給ふぬかといへハ中将
六頃
うなづくさし給ふりておしとも衣ともこゝろま
七頃以中将
いらん人のこれもしげるきうるぞひあらんこそ

犬ずまるべきれ。わが心あやまちなくてうすぐさは。
さしなをしてもなほどうこぞうんとおぼしられど。
それさしもあらじ。ともくもさぶふぼさふし
あらんとのどやかなこれだんより得るまま寸
ことあるまでかりそりといひて。我いまうとのひめ
茅上
君はこれさぶめるまひまへりとしへば。君のうち
孫ありてことばまぜ給ふぬをさうぐしく心やま
しとしぶ。ちれかこ。まれさぶめれたるせるなりて
ひぐらさねたり。中将はこれしとりこさくとてんと。
心入てあへましひねまへり。よろづのことなりそ
（写本詞八語そしより女ノ雨をたとへと引て云り）
へてあげせ。まれこちれさくこのよろづのものを心

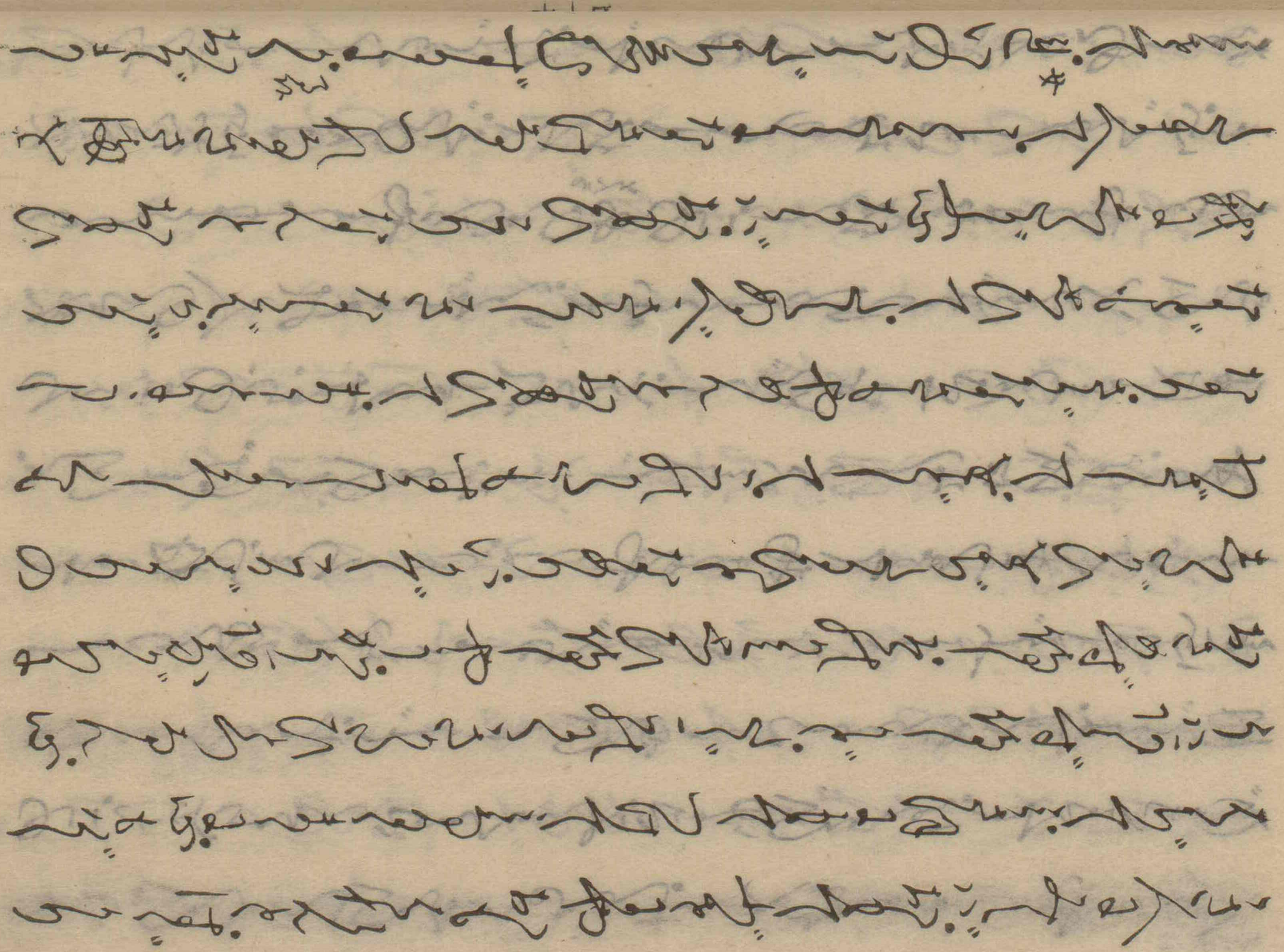
まゝせてはくりいぐすもつまんじのもて何そび
ものゝそれ物と(あと)恐もさぐまゝぬはそばぼきざれば
ゑくりもげまうしもしほべりくりと時まつけ
つさ海をへて今(ごま)めりしまゝめうつりておりし
きもありぞ(じ)まとしてまゝとまうりしき人の
でうどのうぐりとすりさぐまゝれりやうありものを
なんなくしいづりしなんなをまゝとのもれよ
ずくさ海しとまゝしけれ物又思(どころ)取まよずお海
れどすまぐきまえしかれてつぎくまさる
ととりまさりけぢめふとしもみてけれ待ずかく
れどひとのこをまぐぬほうらいの山あしら海(うみ)

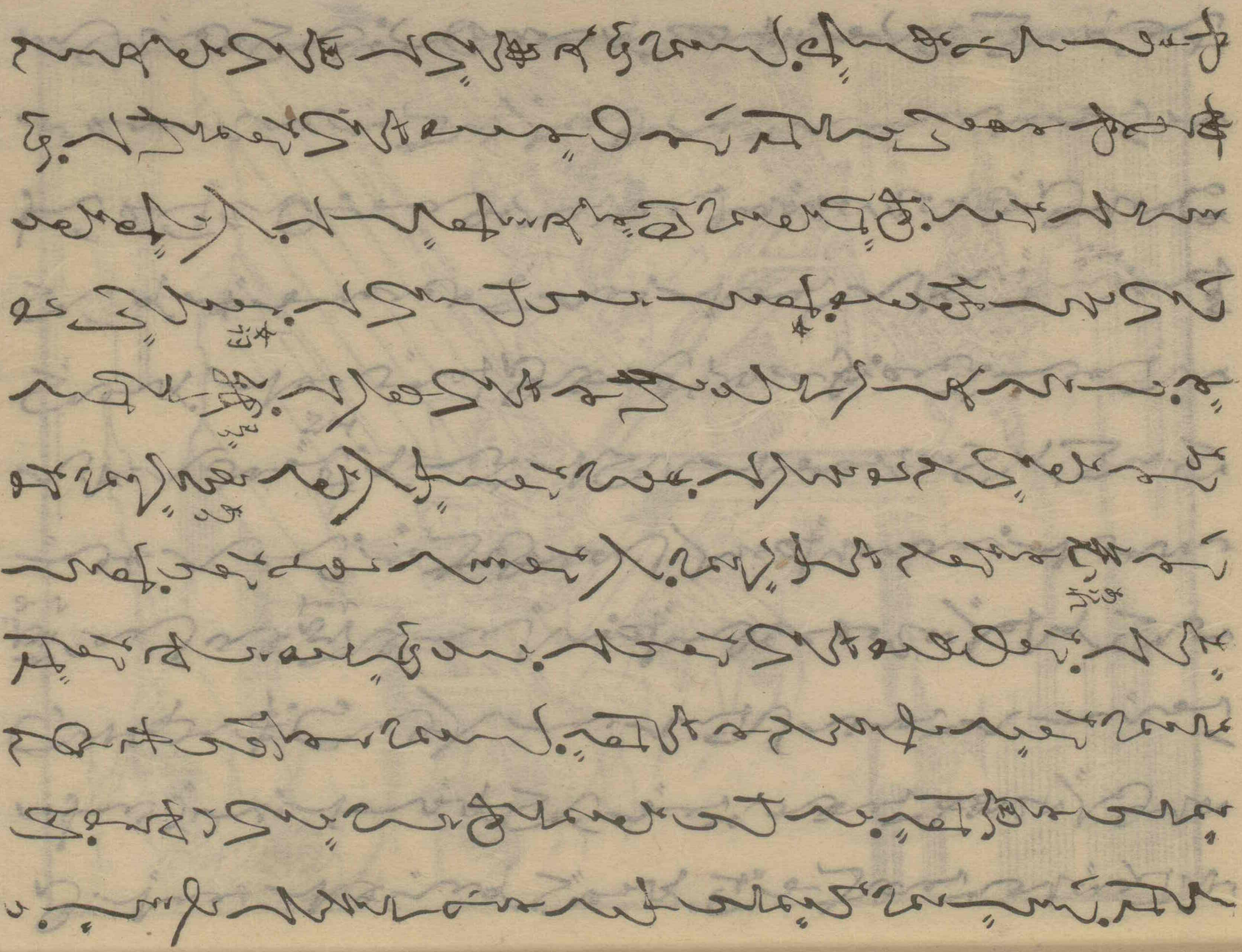
のいかれるいとのすぐるうしまのくげしきけぶ
ものうちぬまこそぬをまのゐなどれおどろ
くしてつくりしうもれくぶまゐせてひと
きハ人のめをおどろかしてだちまはまざしめど
さてありぬべしよれつ日の山のこゝずまひ水の
ながれぬまちうき人の家みあうさ由げまとしな
つしくやりしびしうるなどをしげうまうきまぜ
ゑすぐしうなしぬ山の乳を木ぶくしばなれて
さゝるしけぢうきまぐきれ中どぞれうろしひ
ときてなどをるんよぎハいといゐひとまわう
もれいとしうぬ前ゐ身あうてをうきうまもふ

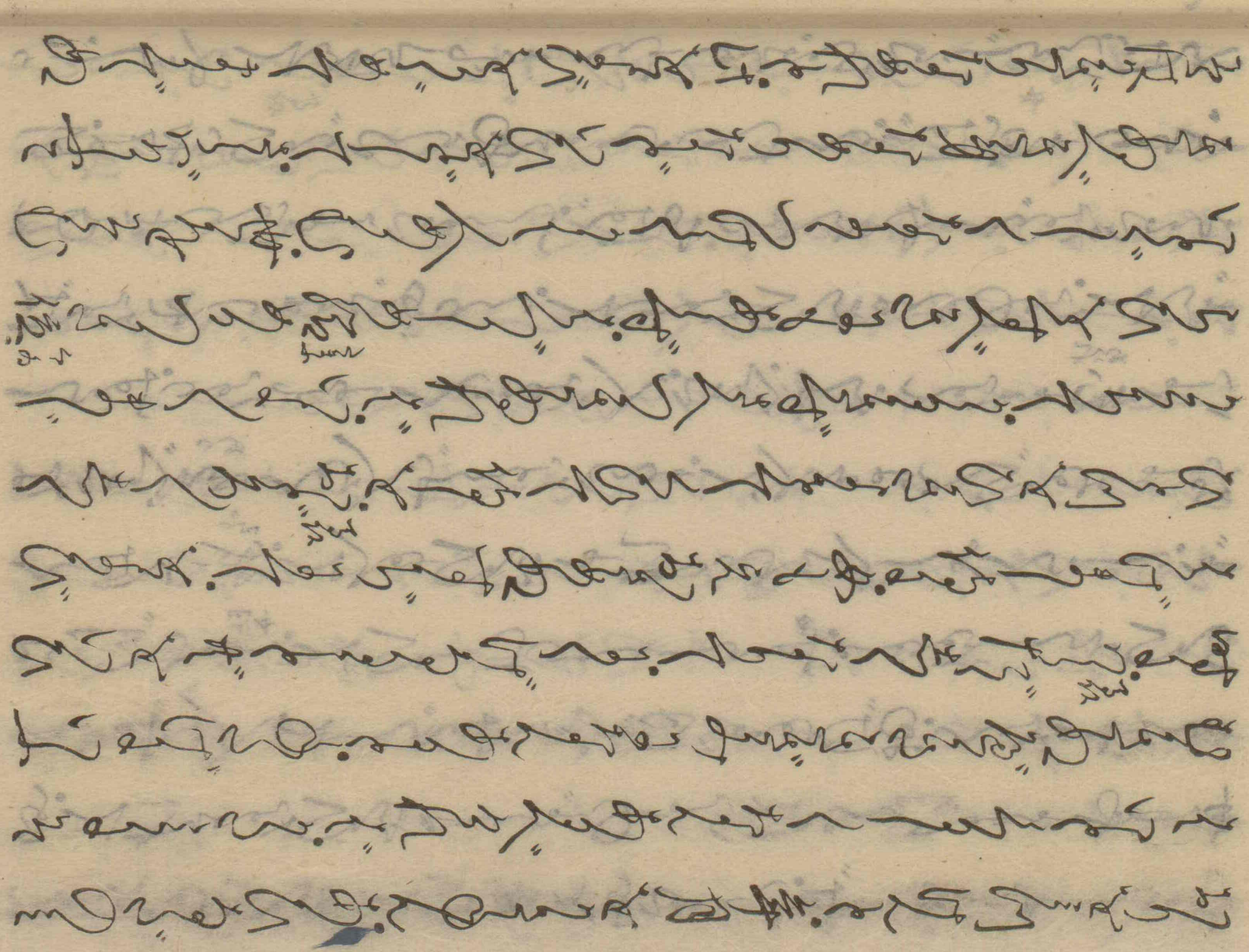
りきことはなくてぞくりこれてんるぐまいし里
ぐきぞくんしるく気(けしき)ぞめりいうちみるまかど
くしくくしきぐちられどなをまゝしれきちを
ときやりまりきえるいうきんべのみでさきてこゆ
れど今(ぎま)ひとくびとりなしべてこれいれ(をと)しちるるん
まりけりぞろうきるぐまくこそ侍れまして
人の心れ時まつりてくしきぐめんこるめれ
なきけをばえこれむまじくせふのへ侍りそれを
じめれしすきぐくしくともや侍らんとてち
りくおれハ(涙)思もめる夜しのふ中(ね)ねいこじく
しんぞてつゝづえをつきてむかひゐまてり(紫式ア詞)のり

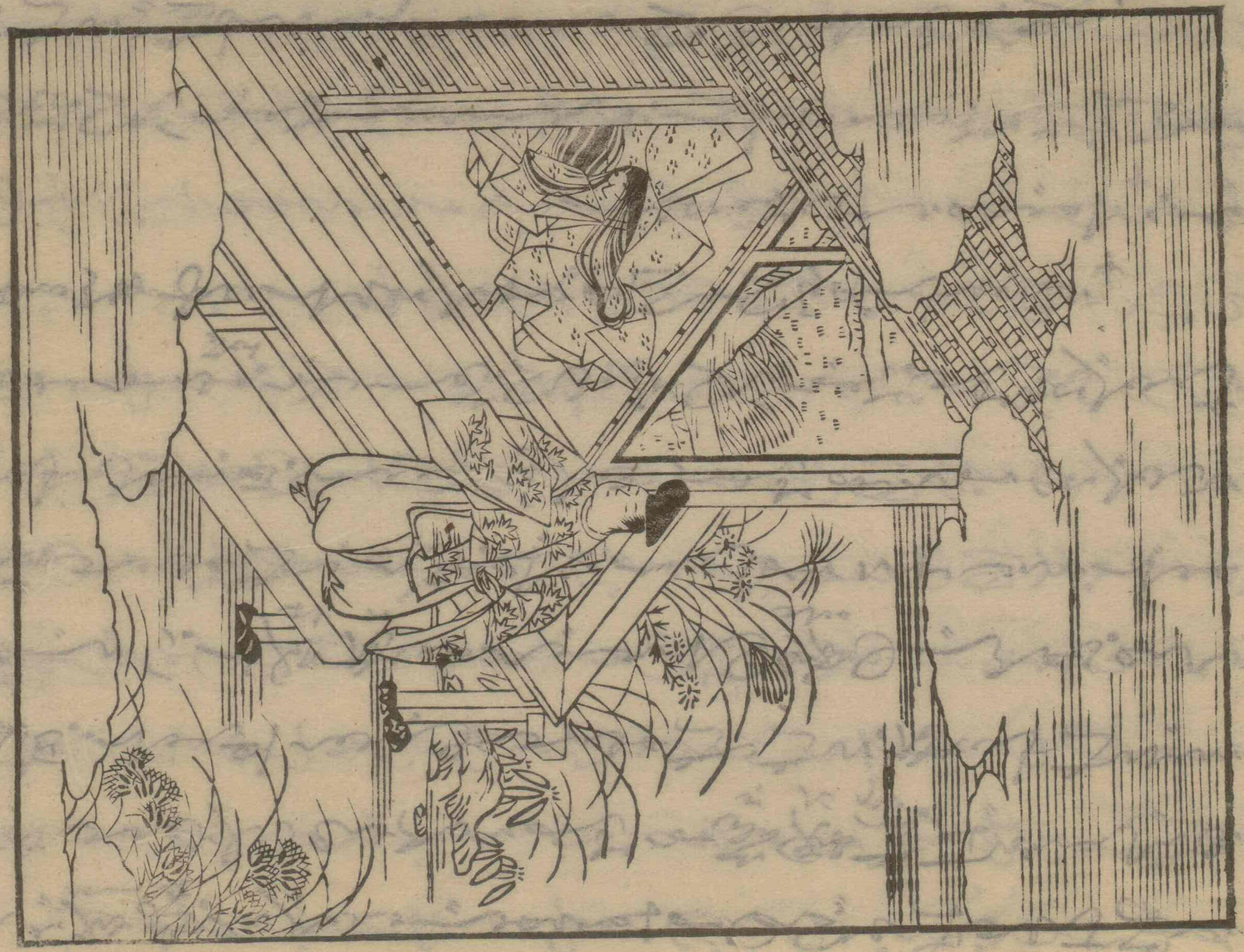
の師の世のことゝきゝとゝきゝとゝきん所のうちすり
もの所はおりしかれどうつゝねでハとのくむけご
ともえ志のびとゞめずなんありけるもやうまるぶ
いとげらうま侍し時おもれとしふ人侍さこさて
させつゝやうまうちなどいとまほまも侍らざり
しかばわるきほどれすきぶちまは此人をまり
まともしひとゞめ侍ずよるべとはおもひるがら
さうぐ志くてとくまざれありきたべりしを
もれ志んじをいてく志侍しかば心づきるういとく
らておひらなりましかばとしひつゝ所まりいと
ゆるしなくうるぶひ侍しもうるさくて。かくかば

なしめ男をみしたるまでなどうくしもせふて
と心ぐるしきおりくも侍て志ゆんは心おさえん
らくやうはなん侍しこのめ(そんな)のあるやうもとより
せひいたらざりけることにもいでこれ人のこゝ
まはとるまさてをいぐしとくれたるすぢのこゝろ
をもなぜにおしくハこゝじとおもひたげ候
とまりくはつまてあまめやうにうしろこゝ程まて
を心はこゞふことハなくもがかとおもひ侍りし
ほどにすくめうるとせひしかどやうくはな
びきまてなよびゆきみまくきうちをもこの
人はこゝやうとまれんとかりるくせひつくろひうも





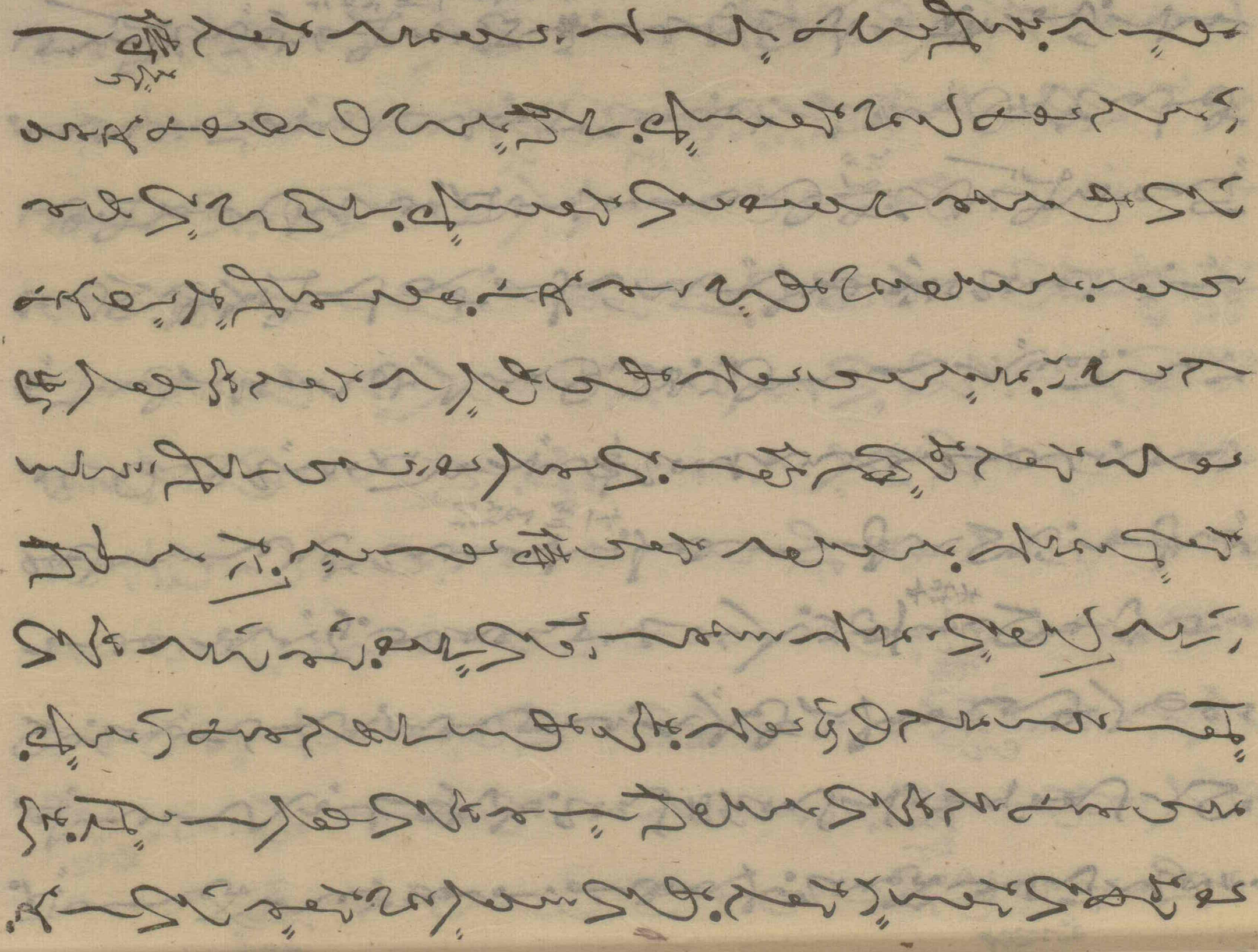




哀(あはれ)とおもひてあひみしことゝもあればこれひ
とりやは思ひかはしつゝえうしなはずいひ給ひぬれ
ど。女すゞろうちなまさゝて
女(をんな)うらみて思ひとげなくかへるてこや思ふかうゝは
わかるべきをおりなど。いひしろひ給ひしかども。ものゝは
ゆるべきこともおもふやうならずなどして。目ころふか
まづそう〳〵とまつりてもさず。あくればをはりの国
くる。あんじの祭(まつり)のそうぐは夜更(よふけ)ていそぐう
ミぞれかゝれ。これゆゑあまりおぼつかなくて。思ひ
めぐらせば。在家孫とおもひたまはれ文なりけり。
うれしかりけるよびぬもすまうりがたかるべく。気色(けしき)ぞめ

なあるりはそぐろさむくやとおまふまへられし
うばいぐおもへるとそしきもうぐてし雪をうち
そしひつまぞぐなまひとわろくつめくるれ
どさりともよひ日ばのうしはいとけなんとせふ給
へしは火ほのうるべきそむけおへるきぬどものあ
はごえるおほいるうこうちかけてひきたぐべき
ものるびしなどうちあぎてよひびりやとま
ちけさ面なりさればよと心をぐりするまさうじ
みそるしさるべきあがどもぐりとまりておやの
ぶまこれよきりなんわるりぬるところへ行りえん
なるうるもよまず氣色（けしき）ぐめるをうそこもをでいと

ひとやごもりなきけるなりしがあへるきゝ心ち
しそざるくゆるしなりしも我れとうとこ○と
さふる此心やありけんとさしもこゝのへざりし
しなれど心やましきまゝなるおもひ侍しは。さう
べきも此つ○よりも心とぐめるいろあひしざ所。
いとあらまほしくてさすがにうすてゝん後のち
さへなん。心やりうしろしたりしさりともしてて
さひとるけやうはあらじと心のへて。とくいひ侍
しをそむきもせず。ころ○まどはさんともかれ志
のびずかくやりしぐいへつ。しごありし心
なぐらはえなんとすぐすまじきにのらしあてのどか



とそいと衣（あれ）とせひ出たり。中将（ちうじやう）それなりげるれたり
ぬふるとのどめて。なぐきちぎりなぞ何えまし。
げるそれろる姫（びめ）のましきはまるさしもれあ
じ。いるまき茶もみぢといふもおりけれ女あひつき
なく。はぐくしらぬ。ハ家のたへなくきしぬるわざ
なり。さるまよりうきせぞとはさぞめるしう
ぞやといひたやしのふ。さて（十一段冒頭詞）まるおるじしるま
うりかよひし（木枯女）所ハ人もしちまきり。心ぞもまと
まゆへありとみしぬべく。うちよこそしつせがき。かひ
ひくつまをとてつき。口つき。えなしどくしかず。
こそこつり待き。みるあしともなく待しかば。

枯くひの女

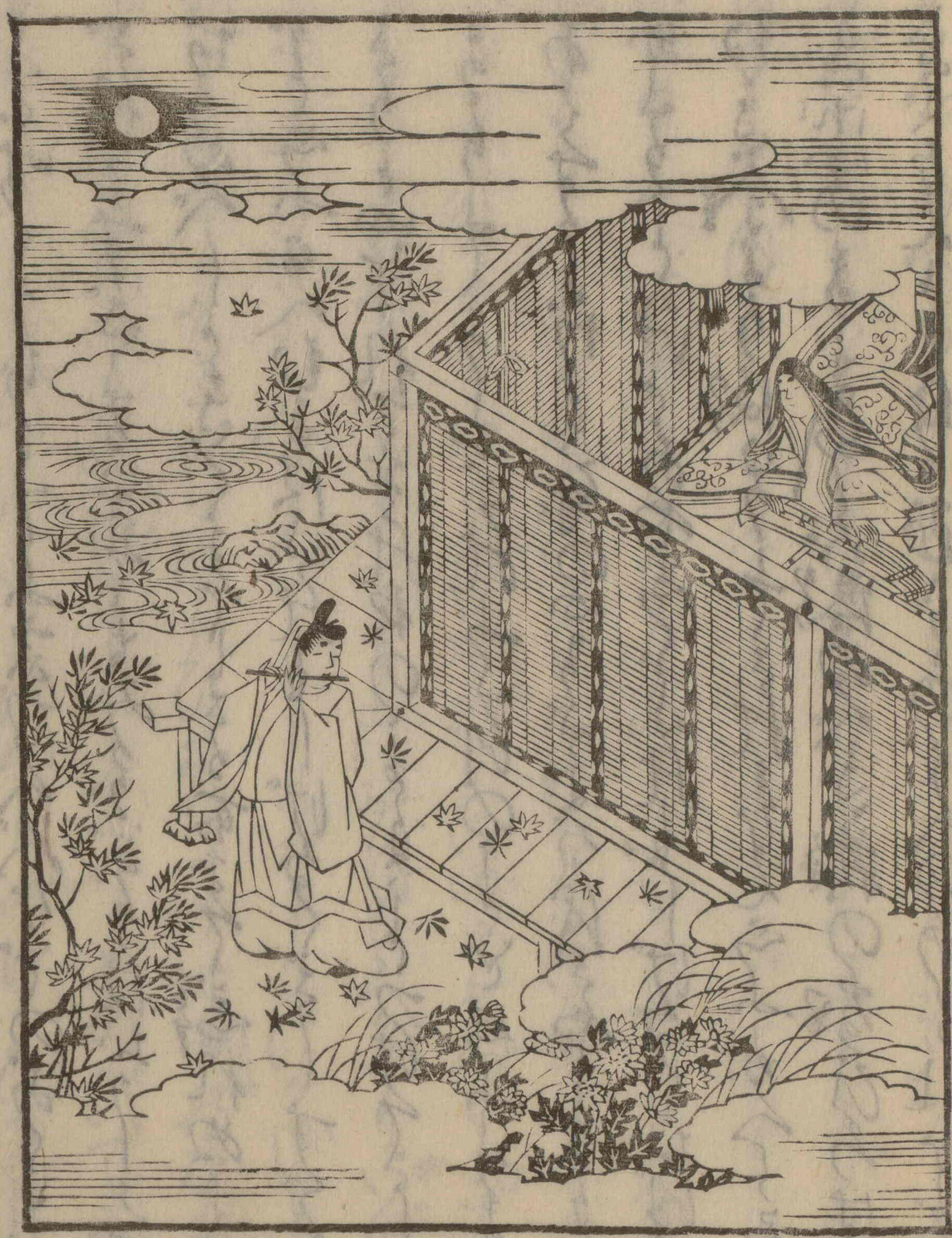
本枯女

これさがか（枯くひの女）おもとうちとけたまゝまで、時（本枯女）ぐくりく
ろへこ侍し程（かど）はこゝよるくこゝろとまり侍さ、これ（枯くひ）
人うきて後（のち）いかゞはをんあれながらもすざぬりは
ひなくて志（本枯）ぞくまりろゝまくまゝすうしま
ぐゆくえんまこれまりしさことはめまつゝぬ不あり
まうちこれむべくもこゝぞかれぐまのこみを侍
かほどまぞのびる心はをり人ぞありけし。
神無（かミな）月のころほひ月おもしろりし夜うち
よりまりぞ侍るまあるうへべさあひて、ぐくるま
まなひのりて侍れば犬細（ごん）その家（ソヘ）ままりとまらんと
するまこれ人のいふやうことよひ人まつらんやどるん。

あやまつくゆゑしこさとそこ。これ本拓めの家(いへ)をたよりざぬ
ゐなりゐれば。ゐれゐらづれより。泥(いけ)の水がげみて
て月ぶるやどうすゝ家(り)をすぐさんもさすがるて。車(お)り
侍ぬかし。もとよりさる心をはきりまやありけん。
これ男(おとこ)いてすぐろさて門(かど)ちかさらうれすのこぶ
川もれまゝりかけてぜげりなをこう。菊(きく)いと面白(おもしろく)く
うゐろひまゝりてかぎるまゝほへる葉(もみち)のこぶれなど。
衰(あれ)とげまゝしかりふとゝろなりける笛(ふえ)とり出てふ
こさるまゝし。鶯もよしなどつぐ出りうゝふほどり。
本拓よくなりまゝぶむをまゝへせてのへかりけるうるまゝし
くかさあるせかりしほどかしうハ何らずうし。

まちのきんべハ、ぬのもれやたらりまきなりして、
すのうちより笑しうるも、とめきしうるもれこしゑ
なれば、さよくすめり月ぬおりつきなりしず、おとこ
いくめでゝ、すれもとよあゆこうさて、庭(はい)の紅葉(もうぢ)
よそふゝわ音なる何ともなられなどもさます。
こさくをおりこる
琴(啓上人こと)の○も月(萬イ)もえなりぬ宿(やど)なりしつれなきん
をひきやとめけり、わろかありなどいひて、今(いま)ひと聲(こゑ)
罕(きく)もやすべき人のあり時ぬ、手なれこいのそなど、
いくあざれかれば、めいとうこゑつくろひこる
末(木枯女こ)がらしは吹(かさ)あとすめり笛(ふえ)の○をひきとゞ

むべさ云(と)れくぞなるさいとだまめさりはすまぶく
くなり代も志してまるさうれしとをばん志さ
でうま志へてるいまめりしくうひ記さられ
つまをとがどなるさまはあしるどまばゆさこて
ちるんし侍し

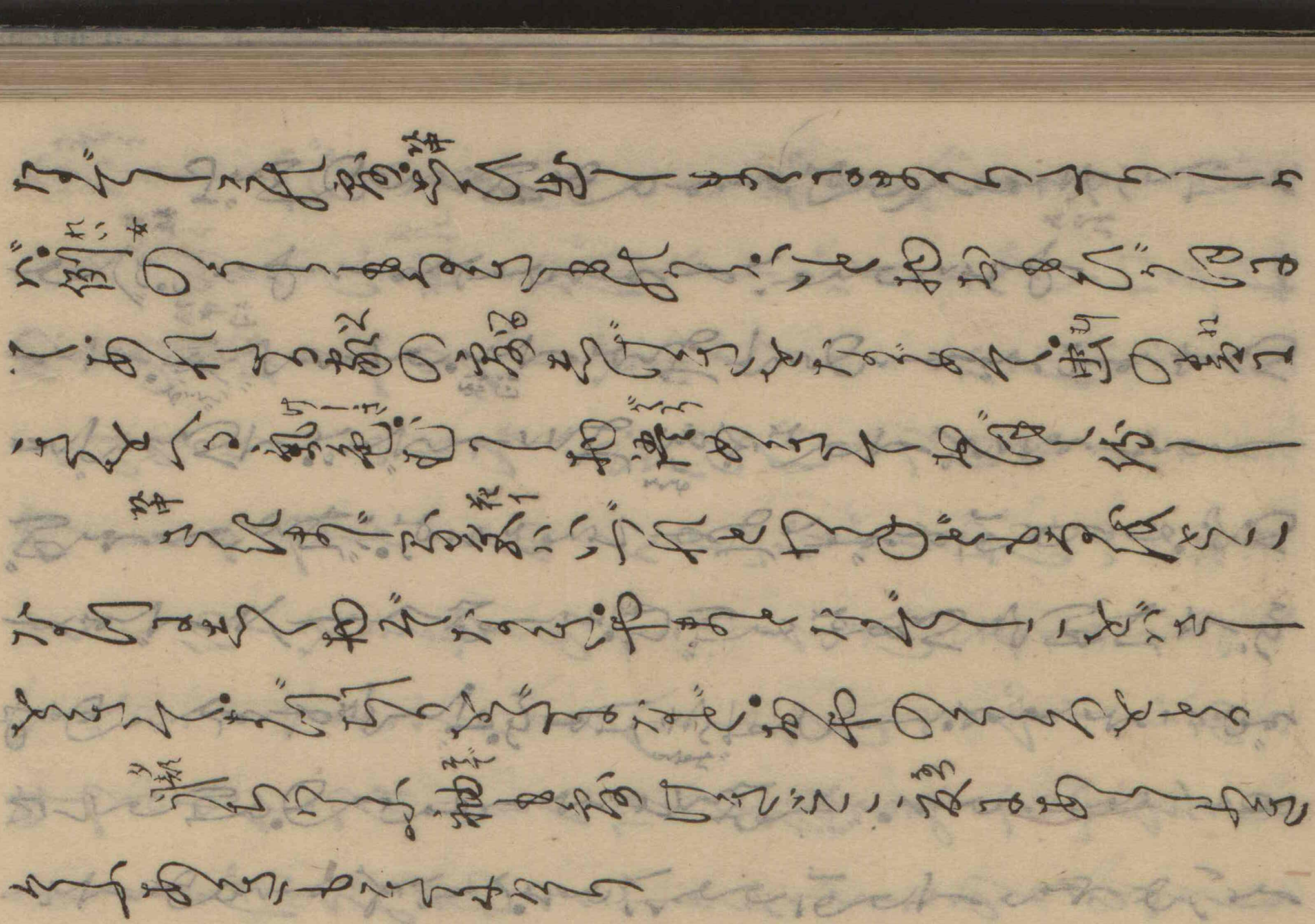


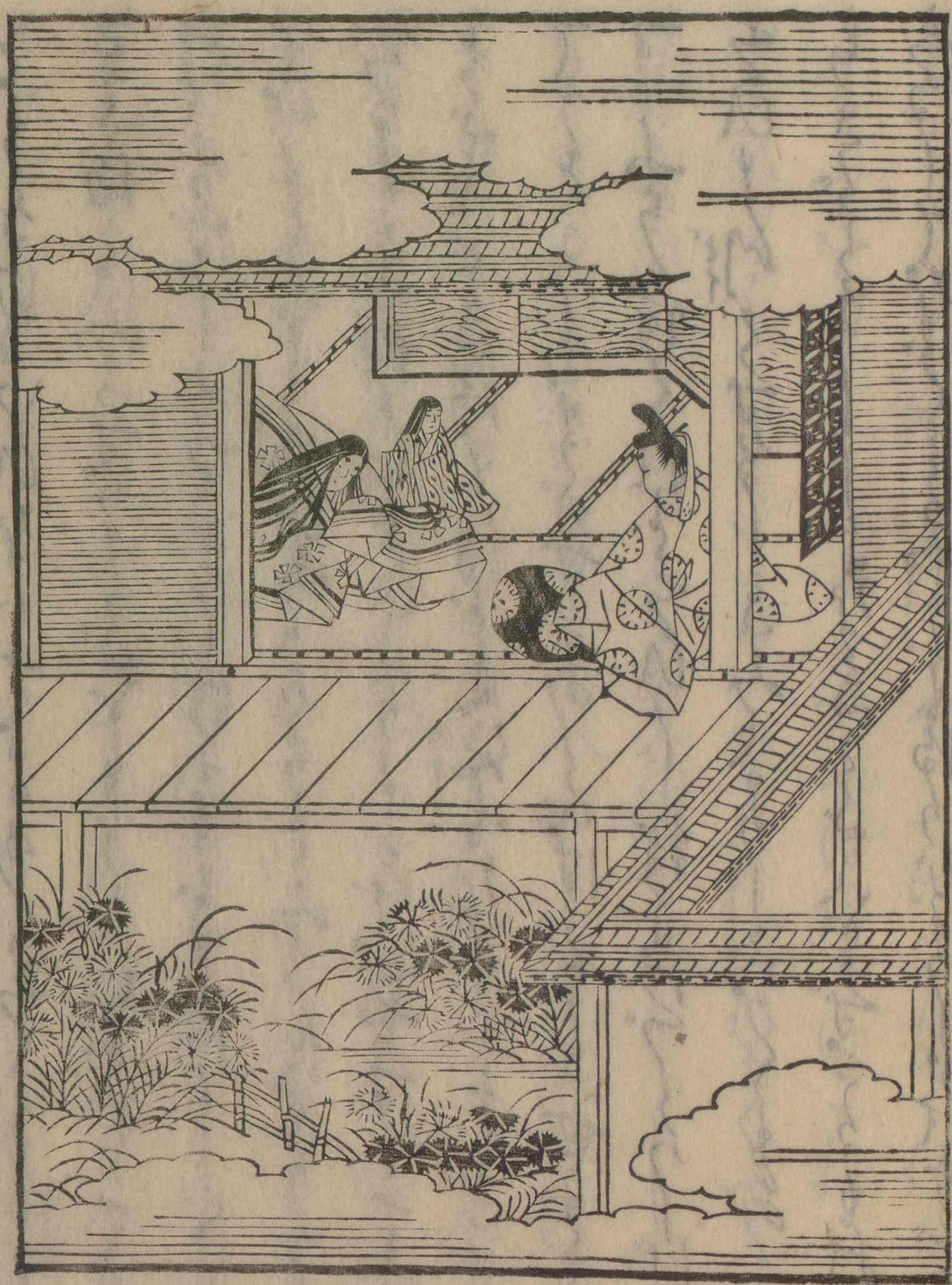
しぐ時ぐうちうちふ家づゝへべなどのあくまぞ
ざれバうすぎこるハさてもみるゝざりはおうしくも
ゆりぬべしとさぐまてもさる所まで忘れぬよす
がとさふぬへむにはこれもしげるくさしすぐひ
こりと心をれてぞれ夜のことまことつけてこそ。
まりこしにしがこれふこりのことを思ふこもへ
あらするまゆうさ時の心ぶまおうはさやうにもて
出こることハいとあやしくこれもしげるくおぼし
ゆきこ今より後ハまりてされこなんさふぬへらるべ
き此心のまゝにおしバ落ぬべき萩の家ひろはぐ
さしなんとこ侍りむざくのうへのあられなどれ。

えんまあへるすきぐしさのこしそおりしく
おぼさるらめいまさりともなくとせあまり乃
ほどまおぼしたり侍なんるまがしがいやしき
いさめまてすきたためんめまハ心をうせしまへあ
やまちしてこんんのかゝくれるる居をもしそつ
べきもれなりといまもむ中将十二歳きいのうるづくさ源
すてしる恵こそさることはおぼしへあり地いげ
くまつけくも人をろくしなりけり此三もの
がたりるまてうちわしひおハさう寸中将十三歳なま
がしハ志れおのもれ諸がさりとんとていと志のびてみ
そめしたりし人のさそもこけべらしけるひるりし

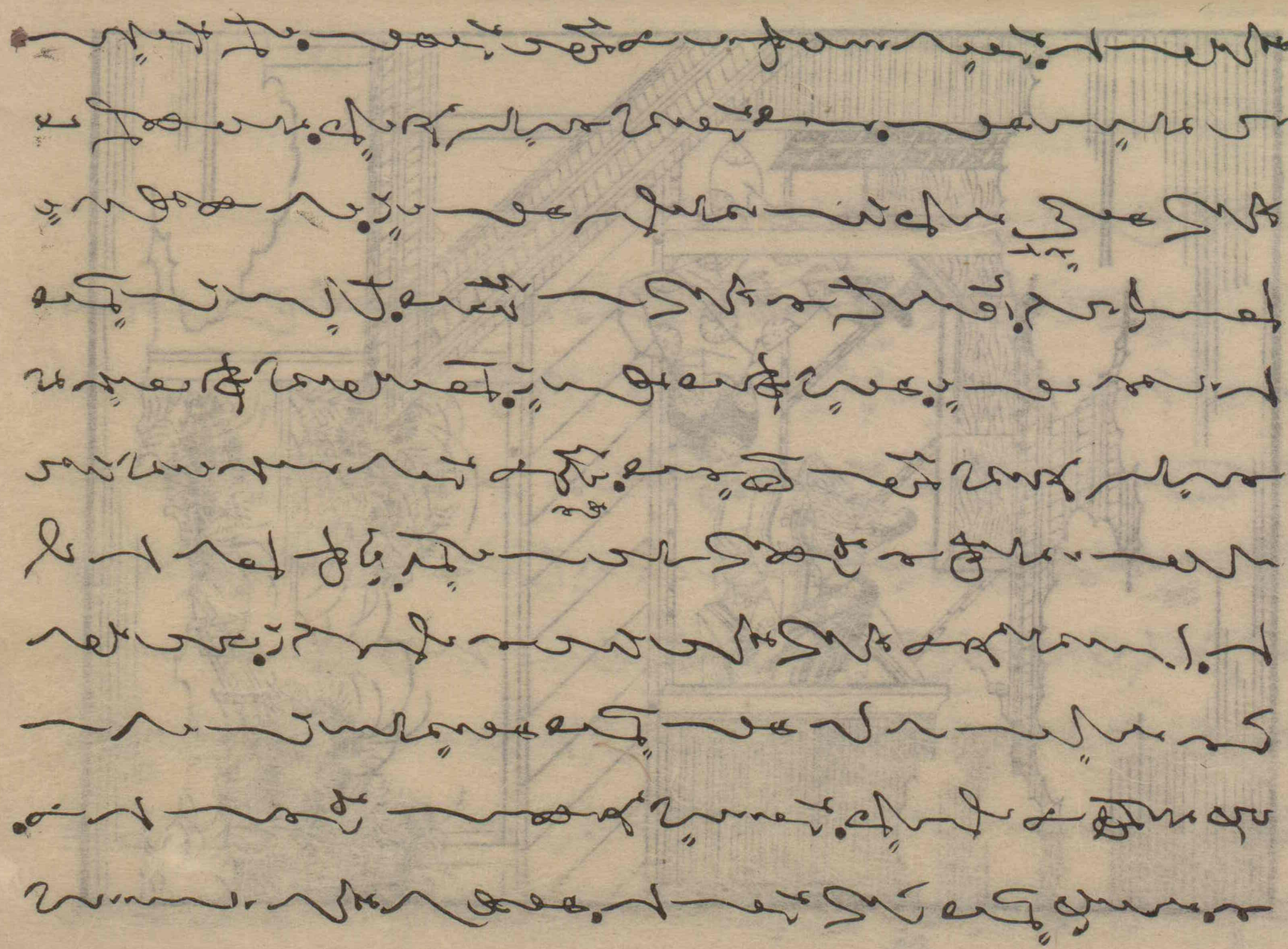
かぶ(さそイ)なりしふべきもれとしも思ひへざりしかど
なれ行(ゆく)まゝに衣(あれ)とおぼしかぶらえぐわれ
ぬものとおもふのへしをおぼゝりまなれだうち
これめりそしきもみしきたのむまつけてもうら
めしとしふこともあらんと心ながらおぼゆりおり
くも侍しをこゝしぬやうまてひさしきとぐて
をしかうしまさりなりへともしひこゝぼしぐあき
ほふまもてつけしらんなりさ夜まみて心ぐるし
りしかばこれめわらうことなどもありきうし
おやもなくいとこゝろぼそげまてぞらばこれひと
しそいとしとまふれておもへる夜もらうしげ

なりき。かうのどけきまをぞしくそ。ひさしくまゐ
らざりし比。これ（旦君）ゑのゆゑわかりなきけるくう
そあることをなん。さるたより所りてかもめいそ
せさりけり。のちまこそきて侍しが。さらうきます
やあらんともしらず。心は忘（まれ）ずるぞしをそこるど
もまで久しく侍しは。むげにおもひ志ほれて心
ばそかりなれば。おさるきもれなどもいりしは。心ひ
まづしひて。なぞしこれ（なる）をおりてをこをしかし
とて。濃（なこぐ）ぐこくり。さて（源詞）それ。さのことぞ。ひとせひ
なんば。いさ（以中詞）やことなることもなりうきや
山（夕執）がのうきほあるともおりくは衣（あはれ）いけよ





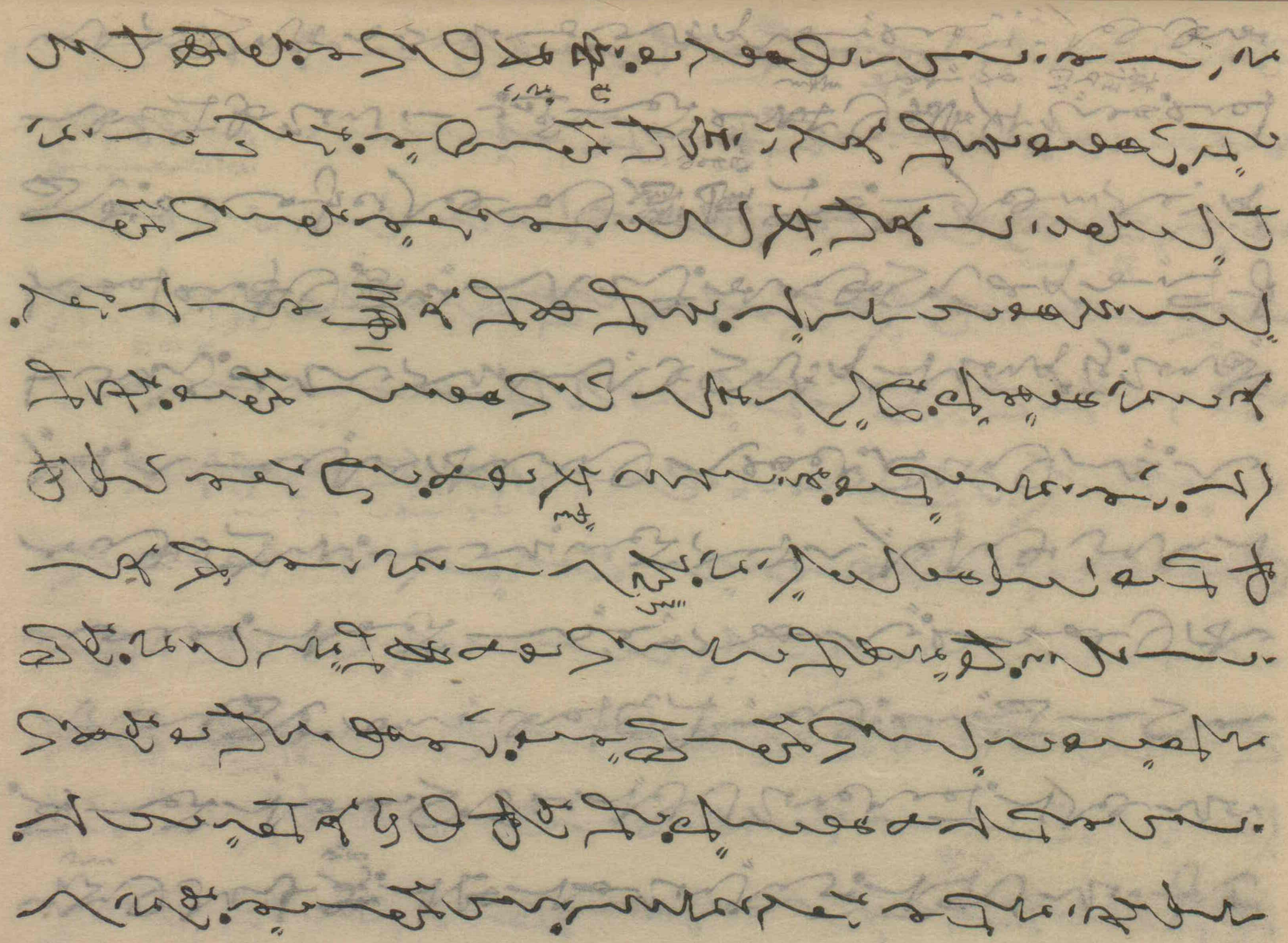
ともなげるいひなして。まめくしくうこゝる
ゑさ海もみしぞ。なまぐるともしおとしても。
いとゞづしくてまつしげるまぐさりしくし
て。ゝしきともせひしりかりとみたんハ。ゑりゐく
くるしゝさ地とおもひしりしぞ。心やすくて又
とぐしとき待し用どる。[あと]絶もなくこそうきなら
てうをまつしがまぐ世るあらバ。はゝるゝき世ぞさ
すふらん。何くれとせひし程る。わづらりしげる
せひまり[どイ]くすりしきみしまりしがかくもあくが
らさぐらまりし。こしなるきとぐしをかぞ。さるもれる
しるしてなぐくこゝろやうも待りなまりし。れなぞし

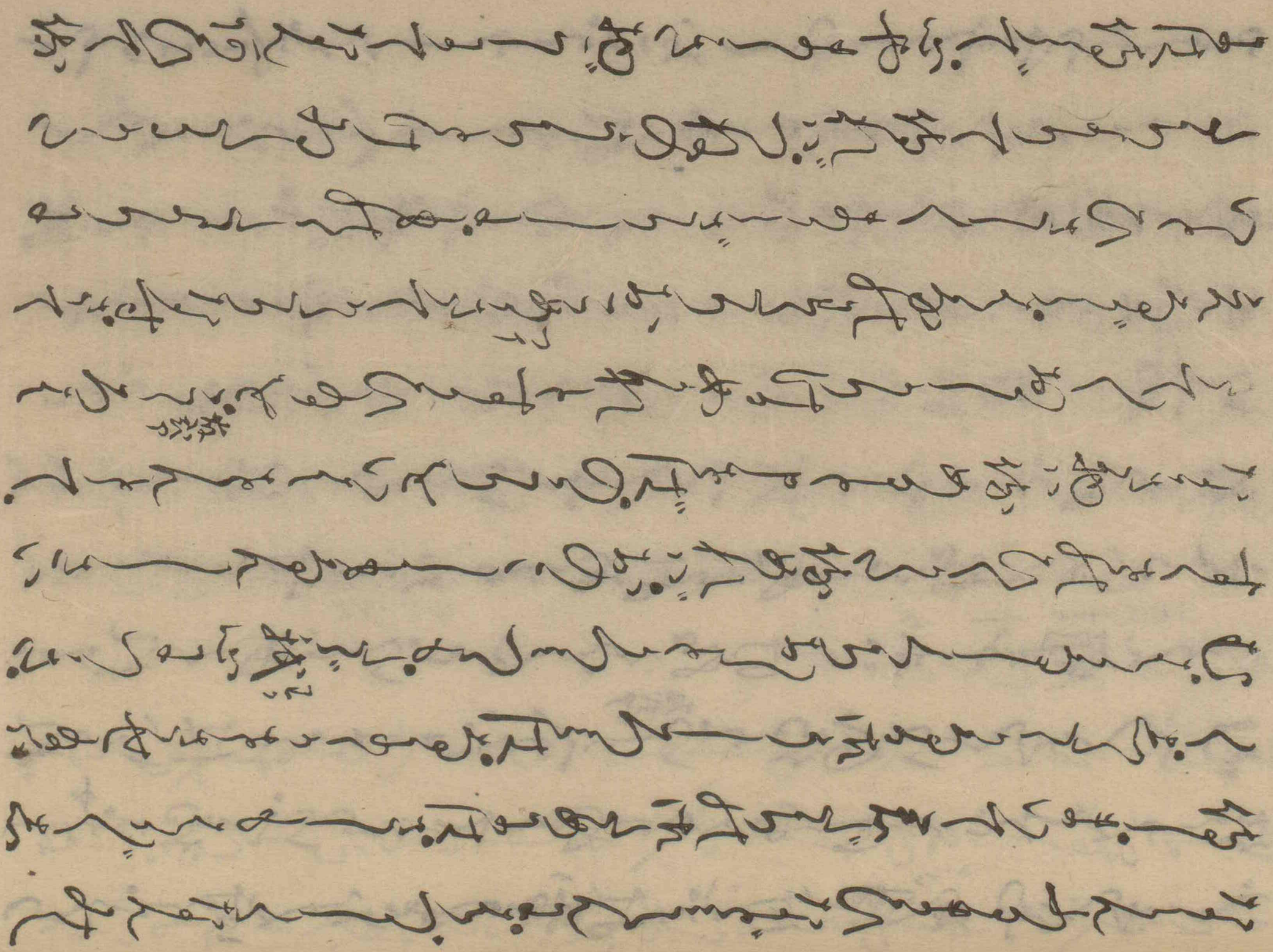


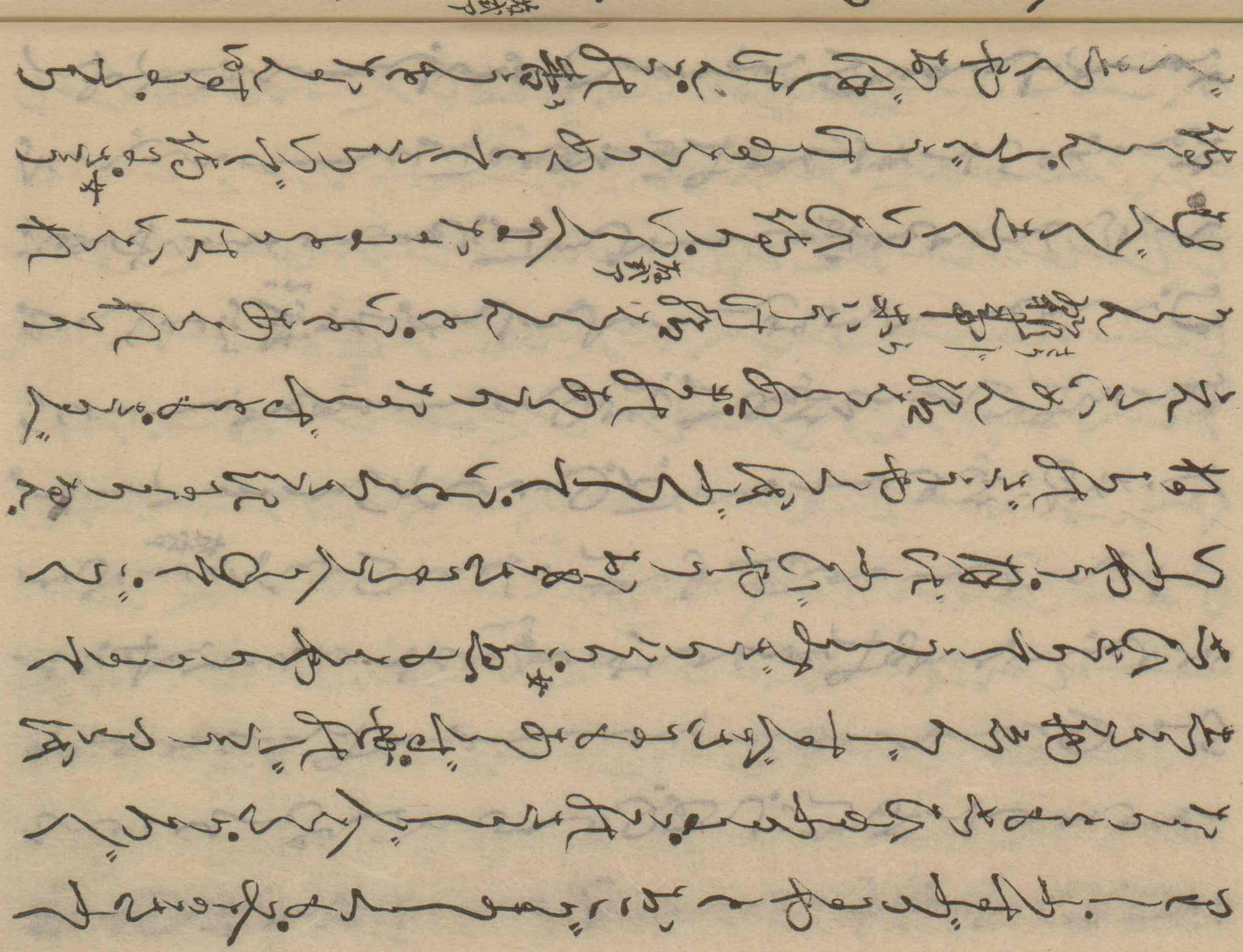
こゝろくるしく侍しかば。いづくへかゆけんかしたがひ
まゐるをとゞまれ。えこそ申つけ侍らね。これこそ
のあひつきぐ。それよりもさあしなからあれつれてつ
しとらひけるを志てぞ。あはれさしぶりしもやく
なきいるをおもひなから。今やうくわすれりこさ
くるゝ。それもしへしもおもひなるれど。ねりくるひと
やりなしめぐむこゝろも夕(ゆふべ)もあらんとおぼし侍(さぶら)ふ。
これなんえさもにもしくしみもしげるまさる
嫁けり。されば杉の女みざれ抱もおもひいでゝあるまじわ
すれがらぬれど。さこしのこりてこんまはかづらり
く。ようつを使いあさまことものりなんや。本枯女これ

孫すゝめけんりどくしさしもすさしろ罪おもう
べし。これ心もとなきこもうしがひそふべかれば。いづ
れとつゐるおもひさだめずなりぬるこそ。世中やうぐ。
うくぞとりぐにふくべぐらしうるべき。これさ海ぐ
のよりさうぎりをとりぐし。なんずへきくさくさひ
まぎぬ人。いづこまかはあらん。吉祥丁めをとひ
けんとすれば。泪うげづきくすしうらんこそ。まろ
まびしうりぬべかれとてこれまひぬぬ。式アリ而
まぞ。氣色あるしとはあらん。すてしづくりゆきと
をめらる。志もがしも。此中にはなぞうことゝ。四方石而
侍らんしいへどとうれさみ。まめやうまをそしと

をめのへいだよごとをとりやさんとせひ紙ぐら
すよまぶ文章の生ま侍し時ゞ一つさめけるし
をなんこゐへしかれ馬頭のやゐへるやうにお目
やけごとをもいひあらをわるくしざ海の世ますまふ
爲き心をさてをせひめぐらさんかるもいたりふ
うくざしのさはなまくのそうせちづしくすべ
てくちあらすべくなん侍らざりしそれはあるも
うせのもとよがくもんなどし侍とてまかりか
よひし目どよあるじれむすめどもお目かりかく
きゐへてはうるきつゐぞよいひよりて侍し故
おやさつけてぢうぢきもて出て我ゆるこの侍う



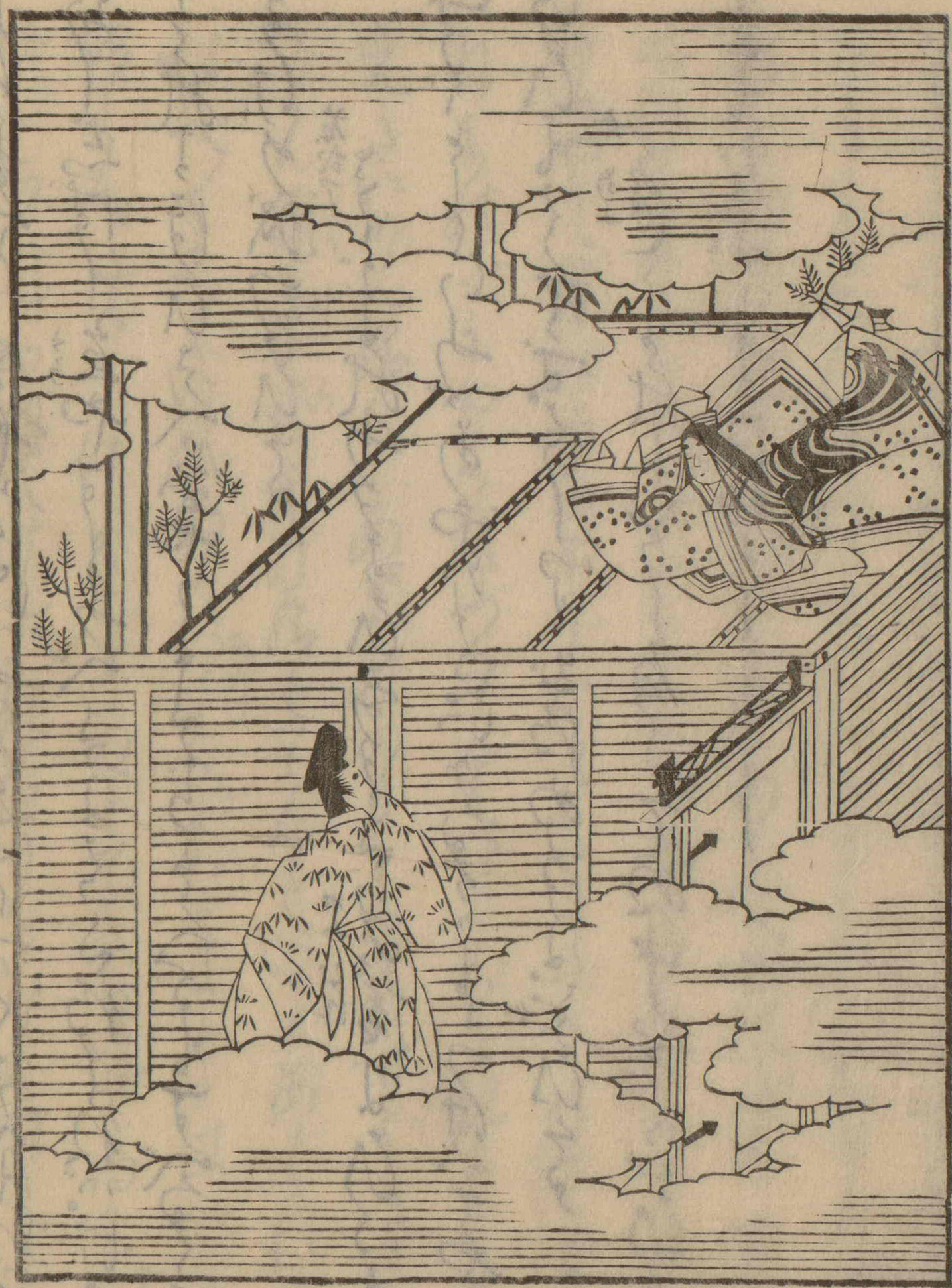




よりのへと。こゝやうまいつゝ候。さて（茂式ア）すぐさんもいと
かしこばし立（さう）やすしふべさまちる侍しねば。げに
それにほひさへ蓋やまゝちそへるもすべなくて。
まげめ候つゝひそる

（茂式ア）さてがまれかうまのひ志るさ多（ゆ）雲（ぐん）まひるま
すぐをといふがあやかさいかゐるとつけぞやと
いひもてゝずとしつゝ出侍めるまゝ。（女）ぞひそる

（女あふ）名也とまれよとしあ屋ぐてぬ中なしがひる
まもなふうまのばゆりしまし



さすがまつらしくなどは侍さと。しばくと
よをば。十七段 ぶんごうちあさまりしと也て。そこにとて
わしひ給。いづこのさるめゝあるべさおいしうま
とまとゝそむりひねさしめ。むくつけさとく。
つまそじさとして。いとむつかしと。式アとあが絶
まくこて。すこしよろしうんことをとゝ。せ絶
なへど。 浴武ア これよりめづらしさことハひなんやとてあり
ぬ。 十八段 当段詞 どべて男もめもわろもれハわづらまれるる
のことをのこりなくこせつくさんと也へるこそ
いとおしそれ。三史五經の道くしさうるを
あさしうまさとりあらむとそあいりなるら

めなどはめといたんかしは世にあることれに
はやけわたくしにつきてむげに志しすいたしず
志もあらん わざとなしひまかは○どもさてこしも
しどあらん人のみくにもめにもとまることに志ねん
におほうべし さるまゝにはまんなくしかと
がきて さるまじきどちれめぶるにばすぎて
うきすくめるるあかうらてこれらのこをやるら
ましばとこ程りし心ちにはさしもおもはざらめ
とこれづらしくはくしきこゑにしみなきれか
どしつことさしびたりこれはどしふの事にも
おほうことぞうし哥(うた)にむとせへる人のやうて哥

まゝけられおしこさゝめることをもぞゝめよりとり
こみつゝすさまじこさおりくよみかけこゝしそお
しさことなれゝへしせねばなさけ事しえやぎ
こんへはしこゝろこんさうべこ営(せら)気(き)なれど又月(さつき)
のもちまいそぎまいりあしこたまはれあやめも思ひ
しげめられめまえなまゝぬ孫をひこさけ九日れえん
まゝばゝこれ佐の心をおもひめぐらしいとまるさ
おりまさくれ家(つゆ)とりこらしきなどやうのぼさ
なきいとなこまあくきさるしでもそのづらげま
のちまおもへばおしくも哀(あれ)まもあるべかりけること
のぞれおりまつきるくめまもとまゝぬなどを消し

くらぶよりいでしろ。ぱく心とくれてこゆ。よろづ
のことまだ。はさてもとおぼゆるありうら。時ぐ
心ひとりぬぐらの心までハよりしどみなきけどて
ざらんなんめやすうべき。すべて心まされんす
とも思ひぶがれまもてなりしいとまほしうら
んことともひとりふたりのつしハすぐしべく
なんあべりけるなどいふまも。君ハ人ひとりの所
なりさ面と心のうちまさひつゞけしまふこれをる
らぶまるさしすぎしまとなくもれしのひけ
れとありぶてきまもいとゞむまふるがる。ぶづる
まよりさりともなくそてくハあやしこさと

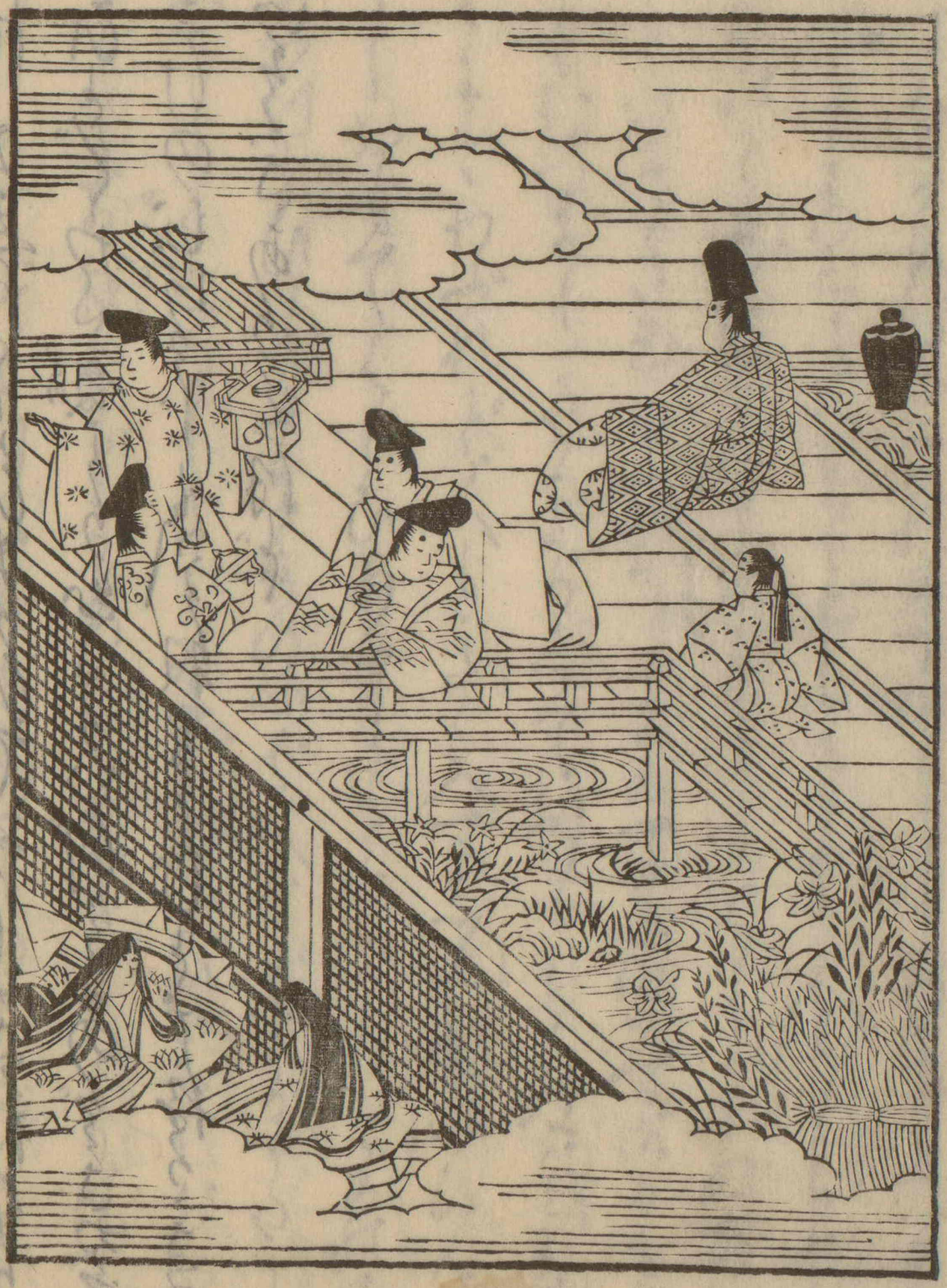
どもは(るり)ぬてあし給つからうしてはふは日は氣色(かしこさ)
もなきわりぐ(源)のこゝろもりさふひのすも(左大臣)おほ殿(との)
の(三)恋い(源心)とおしけれバまゝでのへり(菱上)大(ゑ)るのけしき
ひとれけちひもけざやうまけるくこゝろれしきる亦
まじらずなばこれしそいかの人ごのすてがたく
とりいでしまめべきはしのまれぬ屋けまと
おぼすやうあまりうりはしさ(三)はりさ度のとけ
がたくとげしげはさひしばまりしまへをさう
ぐしくて中納言(ちうなこん)の君(ここ)中務(ゐうづかさ)などやうれどし
なべてこゝぬわかんどもはしたるふれごとなどのかひ
つあけさまこゝろれかゝる(三)はりさ度をみるうひ

なりとおもひ罪しらり。おとぐも口ゝりのそうち
とけのみれば。此（三）事（きちやう）へぞそくおりしまして。此（三）把禮（のめがぐう）
きこしのを。あけ（源氏）さまとかがこのへば。人ごとふ。
あかつまとそけうそくまりおり。いと（地）やすらり
なりれ。ゆるまひなりや。くらくなり。祥（みど）まひなり
神（がこ）。うちよりはふるがりて。侍りなりとさこゆ。さし（源氏）
れ（地）いそいこ給ふ。如なり。二条院（でうの院）まもおるじす
ちまて。いて（源氏）まかしがんいとなりやましさま
とておほとのごもれり。いと（地）あしさとなりとこ
れかれさこゆ。こされかみまて志てしくつうまつり
人の。中河（なかがハ）のわたりなる氣なん。これ此水（ごろこづ）をさいれて

すぐしさうげは侍とさうさ程いと（源詞）よりなりなりやましさるうしなりひさいれはべりん所をとのまゝ（地）のびくのゆるたがへどころはあまるなりぬべかれどひさしくほどへてわすりのへるすり。うゝふさげてひさうがへほかぎ夜へとおぼさんをいとおしさるるべしこされかうまおほをごとのへバうけ給なりしこそさて伊与（いよ）のうこの領（あそん）の家（いへ）に。つきむしと侍て。あ房（ねうだう）なんまかりうつれり比にて。をげさ所に侍れがなめげなりしとや侍らんとしふまなげくをさうぬて。それ（源詞）人ぢりくらんあんうれしうるべき。ぬどをさ接（さび）ひは地おそろしさ心ち

すべきなにぐそれ事(きちやう)のうしろまとのみへが
げ(地)ゐるしさおまし所にもとて人なしらせや
ふいと思(しの)びてしとうしにしらぬ所を
といそぎ出ゐへがおとぐ(左右)にも男し給ひず此ともに
もむつましさうざりしておしましぬ(紀守)りまは
うまとわぶれど人もさて入ず志ん殿(ぞん)のひんが
しおもてたしひあ望さきて、うりゐめれば
志のらひしたり、あの心ばへなどさかるに
おりしく志るしたり、ゐ中(ゐり)家(いへ)ぶりしたぐりき
して、お栽(せんざい)などころとぐめてうへたり、凡すぐ
しくて、そそはしとなきむしのしゐぐ男

[illegible]



君ハのどやかなるなぐめのまて。（源心）これ中の志れまこり
いぞくいひしこれなくなりしとおぼしぐ。
おもひあがれる氣（けしき）をさくをさまへるむすめ（定塚）
なれば。極りしくて。みくとぐ免なるまこれ
ましおもてまぞくのけりひする。こさぬの髭（をと）ちひくら
くとして。わらさしゑどもまくらぐ。さすがまし
のびてわらひなどすりけくひ。ことさしびたり。
うしをあげたりなれば。（紀守）うこ心なしとむつりて
おろしつれば。火ともしたりすさかげ。さうじ（陳子之）
のうこ（紙之）よりもりたるまや（源）をたくりのてこゆやと
おぼをどひましなければ志ばしこさく始はこれ

ちりさもやまはしとひねとるなるべし。うちさくめさ（耳云）
いふことぐもをさくめへぞ。我（旦が）れうへるるべし。いゆく
いさうまめぐちてまぶこさまやんごとるさよすが（葵上ノ事）
さぶまり給へるよそぎうぐしるめれされどさう
べきくまはよくよそくれありきまなれなど
いふまもおぼすとのこ心まくりめへれぞおぼ（源 若毒ノ事）
むひつぶれてかやうれつゐでまもひとのいひもら
さんをこさくつ宣こうんときなどおぼしまことなる
ことなれバこさくさし給ひ式アマ宮の娘君（きさぶきやうのこや）（ひめ ぎこ）にはさ
がかしてまつり給しうるなど我すこしほゆが
めてうるも罪ゆ。くれろぎがましく。言ずがち（うこ）

まもあるなかなをこそとり志(ハイ)なかむかしとおぼす
うきいでさそぞうろうけそへ火(ひ)にかくらげなど
して出くぐ抱ぐりまいれりとぞり丁(ちやう)もいうま
そはざるこのころもなくてはめざましさあるじ
なんとののへかなまけんともえうを給ひす。
りしこまりてさふらぬ。ぬりしつゝれおましまうり
なるやうまてお目とのごもれば人ども志げまりぬ。
あるじの子どもおりしげまてありわらはなる
夜(さん)上の目どまぬ(ご)んじなれしまもあり伊与(いよ)のもけ
の子もあり。あまるあるゆ(なり)まいとけはひあてしる
まて十二三ぞりなるもあり。いづれ(源氏)いづれなどし

ひとのまゝ。これハ右衛門のことのすゑの子にて。いと
うるしくし給けるを。おさるゝさ程にをとられ侍て。
所の（方様）なり人のことすがまゝくて侍りなりざしなども
つき侍めべく。けしうハ侍らぬを。飯（てん）ごなども思ふ
あひかけながら。すかくしうえ（ハイ）まじらひ侍らぬ
めると戸寸。衣（源詞）のことやはあひ君や。まうしの侍（のち）の
おや。さなむ（紀雪詞）侍と戸すよ。つげ（源詞）ちゝきおやともまうけ
たりけるれ。うへ（西門）にもきこしめしときて。家づゝ
にいづしたてむともしそうをし。いりに成に
けんといけぞやの給ひしをし。せこしてさぶめるゝ
もれなれなど。いとおしすものゝ。ふいよりくる（紀雪詞）

物し侍るなり。世中（よのなか）といふ。もれ。されこそ今（いま）は
むかしもさぞまかりしること侍しは。なかなかについても
女のすくをはうかひしるなんあれは侍るなど
きてさす。伊与（源詞）のみ（きけ）ハかしづくや。君（きミ）とさふらんか。
いうぞ（鶯詞）わたくしれしうとこそハさひて侍める。
すきぐしきことくなるよがしうりけじめてうけ
ひき侍しずなど中。さり（源詞）ともまのうとしたちのつきぐ
しくいまめきこんにおろしこそむやは。かれ所（すけ）
くいとうしかりて。氣気（けしきバ）ハめるをやなど。もれ禮（ぞうら）
しものつ。いづくまぞ。これ（鶯詞）しもやにおろし侍
めるを。えやまかりおりあへざらんと男も。恐（地）いすし

こそこれ人ごすれこまかしつ志げまりぬ。源ハ
とけてもねられぬ。源いとづしがしとおぼさるし
は。此先さまそこれ小のさうじのあるこまの人の
けはひする紙ごろまやうしいふひとれかられ
こるうしなるん。あれ衣やとこれこころとじめてやをしれ
きそこちぎのへがありつる子のこ忌まて拍を
まはりいづくはおはしますぞとかれこうこ忌乃
おりしきまていへがこ。手餘詞まぞかしこうまらうとは
孫給ぬりかいはちうこんとおもひつる紙されど
けどをかりやりといふ。のこりけるこ忌の志どけな
きいとこくまうよりひこれバいまうとこそ給詞

小忠詞
ひさしうぞおほとのごもりぬるをとまはしつる
れ
れなりさ海をこゝろてまつりつるげよこそめでこ
うりかれとみそうまいふ。宇餘詞ひるゐしまうしうば。のぞ
きそこゝそてまつりてましと。のすげよいひて。ほ
ひきいれつるゝ思す。源心めこう心とゞめてもとひさけ
りとあぢきなくおぼせて。小忠詞まろはそしまゝ侍しむ。
ゆかくらイとて火かけなどすべし。宇餘女ぞはこゝこの
障子ニ
さうじぐちすぢうひこる程まぞかしたるべき。
宇餘詞中將のきみはいづくまぞ。人げとをきこてちして。
もれおそろしといふなればなげしれ志もまゝ人ぞ
かしていへすなり。志もやまゆまおりてこゝ今

まいらんと侍（さづら）といふ。これ（源心）しげまりぬかけそひな
れば。かけが口を心みまひきあげまへれば。あるる
よりハ出しざりけり。本ナをさうじぐちまとそ。
火ハほのぐらきまとまへ。がらひ何ぐらものの
どもを並れば。こぐらがりしき中（みか）と分（すけ）いり給て。
けそひ志つ所まへまへれば。こぐひとり。いとさで
やうまてかしたり。たまかづらりしれど。うへ
なまきあをしやうまで。（京塚心）もとあつ（中ぬす）へと思へり。
（源氏）中ぬめしつればなむ。人しれぬ心ひのしるしあるそ
ちしてとのまゝ。（京塚心）ともくもしひわれぜ。もれま
とそはまこちして。やとゝびゆれどかほまきあ

のさいりてをとまもしてずうちつけまゐりしぬ
心のほどこそ殆んとりなれど年ごろおもひ
わたる心のうちも字にしてきんとてなんかく事
おりをまちいでたるもさしまあきくいあしじと
さひなしゐへといとやりたるのみて鬼神を
あしぐ用まじきれけもひなれどりしまくこゝは
人をもえのしたしぎ心ちさしたりびしてあるまじき
しとさへがあさましく人ごゝへまこそ仰ぬれと
いふもいきれしたるなりこさしまどへるかしこさいと心く
あしくらうしげなれがおりしとこゝのすてたがふ
べくもあしぬ心のしるべをしりぎまもおぼめい給事

すきがましきさ海にはよまえ（もイ）しそてまつしじ。
しふことすこし男ゆべきぞとそ。いとちいさやかれ
れだ。かきいざきて。さうじのもとまいで給ふぞも
とめつゝ中将ぞ川人きなひろ。やく（字陸）とのゝまあや（中恐）
しくてさぐりよりこゝろまぞ。いとしくまほひこ
ちて。かみまもゝゆりかゝる心ちするまにひこり
ぬ。あきましうこはいかゝることぞとしひまどちゝ
れど。男しむかゝるし。なのこくの人なしがこそあら
らゝまもひきかれぐしめ。それぞまゝ人のあまゝし
らんハいつぐなりん。心もさはぞそしてひきこれど。
どうも（陸）なりて。おくなりおましまへ入のぬ。ざこうじ

とひきてくあつきまれむかへまれをとと
のかへぬ（中陰心）ハこれ人のせふんことさへしぬぐり
とりなきまなぐるまでこのとまなりてけとか
やましげるかいとおしかれど（地）といのいづくとりも
とうでのふ云の葉まかあらん。このそれしらづり。
なきけくしくの結つくすべかめれど（中陰心）なほいとあさ
ましきまうけくともおぼしずとそ（中陰詞）ずるらぬ男
なぐもおぼしくぐしけれ心ぐへの程もいかに
あきくハせふのへざらんいとかやうなりきはく。き
くとこそ仰なれとてかくとしたちのつるをふく
なきけるくうしとせひいりたるき雨もげまいと

おしく心ちづしきけれひなれば。そのきは〳〵を
まぶさひしてめうねごとぞや。中くをしなべこゝろ
つるおもひなしゆへゝなん。うしそてありけり。
とのづゝきて給やうもあらん。あかがらゐるすさ
ぶはさらになりしもぬをさらべきまや。げよりくあぐ
めれそてまつるもことくりなるこゝろまどひを。
こげりしもあやしきまぞなんなど。まめごらて
よろげまのこまへどいとこぐひなるさ[illegible]なりき海乃。
いよくうちとけきてしんことまびしなれば。すく
よりまそろづきなりしとはこしそてまけりとも。
さまるのいずひなるさまそすぐしてんとしひて。

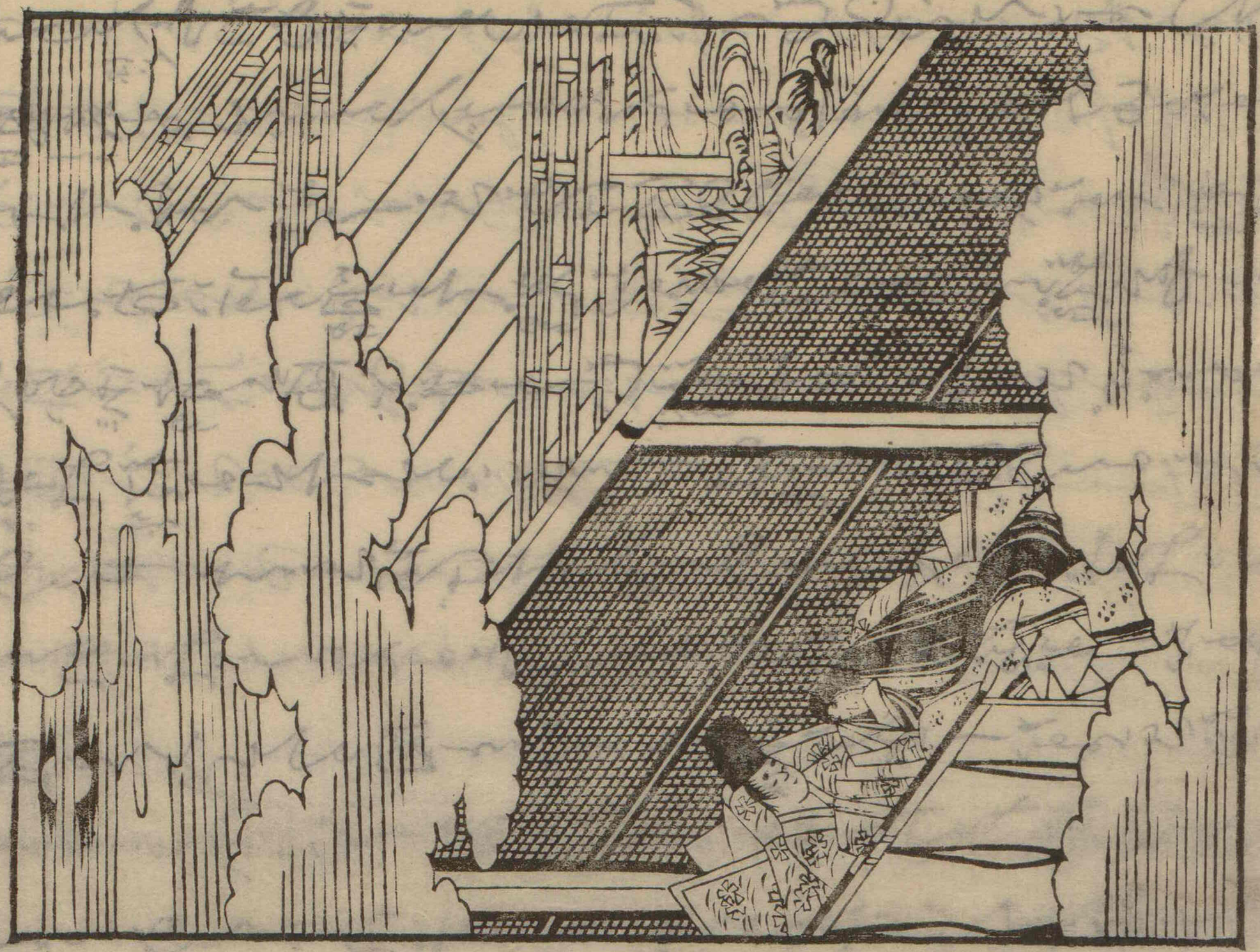
これなくのこもてなしたり人（地）がれたをやぞくろ
まづよき心をしぬてくへされバなほ行（行）のん
ちして、さすがまあるべくもあらず、まことまころ（本様心）
やましくて、おかがちなる（三）れこころぐへを、いふる
なましとしひて、おくさ夜などいとゆくれなり心ぐりし（添心）
くはあれど、みざらましりばくちおしりしまと
おぼすなぐさめがくくしとおもへれバ、なぜかく（添詞）
くとましこさもれましもおぼすべき、おぼしなきさ夜
なりしもしてぢぎりあるとハしひ給ひ、むげに
世後しひしらぬやうに、おぼれなんいとつくき
とうしくられて、いとうくうき身のほどのさぐこま（本様詞）

らぬけりしなどしれかまでかゝる恋しくさこえま
しかば、おのましき我身のこまで、これをしのま
のちせもやとせひの人なぐさめましとてとりう
ちなかうさの袖を思ひまどひるくさみまへ
まじきなりけりしとは今さとれけれそてみえ
家さ後、げるいとりとけなりぬらなしず頼なく
さめ給ことは何なるべし。恐もなきさめ人ぐおくさお
てかといぶるなりけるよりか、花車ひきいでよ
なまじいまなり、かきもいでさそ、めなどみれりさぬ
がへして、我かくいそがせめべきふたじいふけあり
愚ハヌやうのつねぐおんしともいやりくし。

さしまへてもいかでかれ文(かミ)などもかよはんことを志。
いとかりなきをおぼすまゝいとむひいたし。おくの
中将も出て。ことゝなしがれば。ゆ(添)りし給ても又ひさ
とゞめ給つ。いかで(添詞)かさきなきべき世にしらぬ(ミ)れ心乃
つゝさもあれもあさかしぬ世の心出ハさ海ぐ
然づゝかるまべきしあしれとて。うちなき給。
れ(ミ)かしきいとなまめきたり。ゑるもしばくなく
ま心あはしくしくて
つれ(添)なきはうしくしくてぬ藤(まつめ)同にとりあへ
ぬまでおどろかすらん。ぬ分のかりさ海をなもふる。
いとつきなくまバゆき心ちして。めでしきれもそ

なしもなりまともおぼしず。つゆはいとすくしきく。
心づきるしと思ひあかづる。伊与(いよ)のゝたもひ
やられて。夢(ゆめ)まやゝゆゝんとそらおそろしくつ
まりし

元輝
身のうき我なげくまあるぞあらる夜ハと
ゆゝきねてぞねもなれける

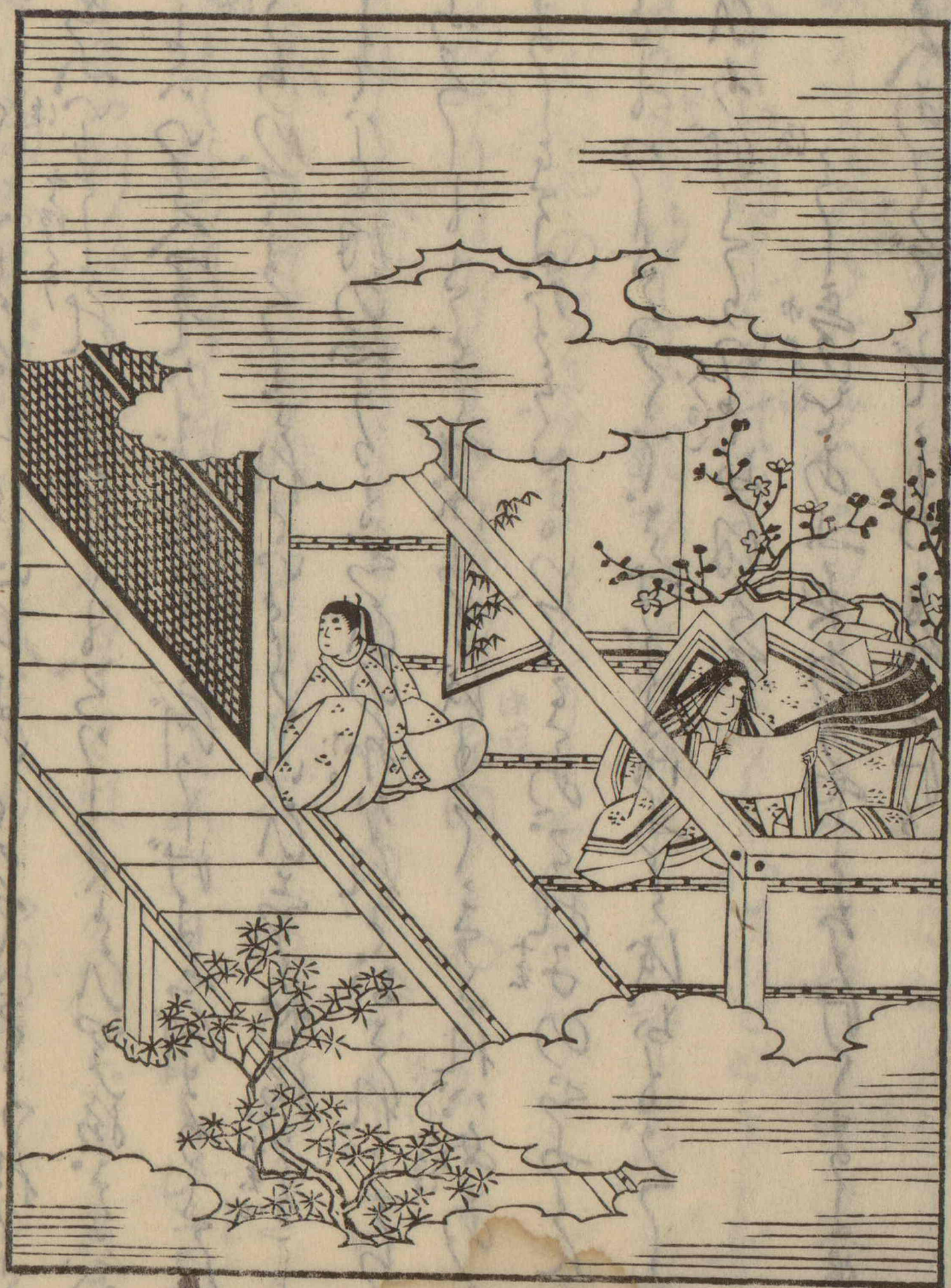


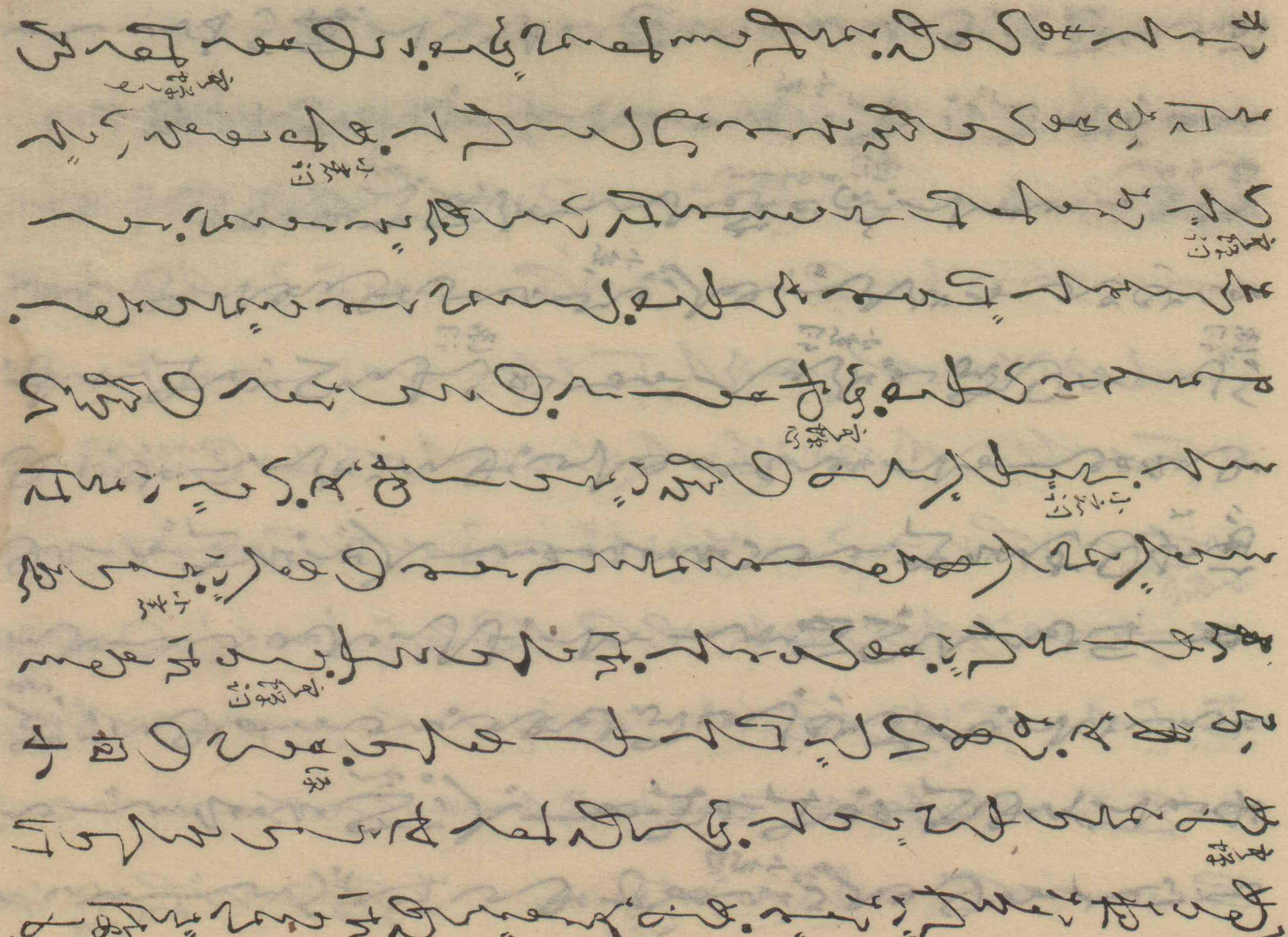
ことあくなればさうじぐちまでとくり給うち
もとも人さはがしかれば ひさしそくわれ給ほど心
ばそくべくろ関とみしたり 流なましなどき給て
これこれからうらんにしばしうちながめ給ましおもて
のうしそくき所げて人ぞのぞくべかめり すれこの
中れ程にしてしろこさうじれ上より ほのかにえ給
へるれ有る夜を身にむ斗おもへる すさぶどもあ
めり 月は何り明にて光おさまれるもれから 行さやかに
えて中くおかしきあけばのなりなよ心なさ 彩れ
氣気もしぐろ人がらえんにもすぐくもみゆるなり
かり人 流れぬれろうにはいとむひいくことつて

やしなはずなきをとがりくちまでいでゆかぬ。
夜はよろりのまでも。とみなもまどろまれ給はず。又あ
ひろくべきかなきは。よしてかの人のおさなん心の内
さ。いらるゝんとふかしくおぼしやる。すゞれるて
とはなけれど。めやすくもてつけてもはらう中の
志前のかひ。つまのくこ河のめしへのひしはげ
はつよ栄しあへをもれかり。その程ハ大夜まのくおハ
しまえ。なをとひとゝきさこておもふこれいとお
そく。これ心はならてくるしく栄えびて。さあうこ
とめしつかれありし中納その えさせてんや。
ちうきげるしとも。多ちくつかへなせん。ぞへんも

ひれさてまつらんとのめへバいとうしろきおほせごとま
分なり。あ(宝塚)ひなる人にのめひこんとやすも。むひつぶ(源心)
れておぼとど。これ(源詞)あるぞハあそむのとさうとやも
ろ。さも(紀雪詞)侍らず。これかるとせ斗(ぞう)ぞくてもれし侍
れど。おやのとさてにはぐりと世ひなげさて。心ゆ
りぬやうになんさてぬかる。衰(源詞)のことやよろしく
罪しく人ぞうし。まことにまよしやとのめへバぞ(紀雪詞)しハ侍ら
さるべし。もてくるれてうとくしろう侍れバ世のこと
ひまてむつれ侍らずとや寸。さて(地)又六日まうて。此子(小宝)ね
てまいれり。こまやかにおりしとはなれど。なまめさ
ろき面にて。あてゞへとそしろ。めし(源)いれていとなう

りくるたひ給わ（小志）ハ心ちよいとめでたくうれしと
さふいゆと（源 宮嬢くす）と此君のこともくりしくとひ罪給さるべき
とハいへ罪しなどしてさげかしげよしげまりこれバ
（源）うらいでまくしされどいとよくいひしらせ給（小志心）うること
こそハと母の心うもさひのかなれどおされごちゝ
ゆくしもこどしぎ此ふらぬもてさこれバ（宮嬢）めあさ
ましきまなりぞもいでこゝあこ此子（小志）のさふんて
ともりしるくてさすぎよ此ふらぬおもがくしま
ひろげたりいと（文ノ詞）おほえて
（源）うし（ゆめ）夢をあふ東ありやとなげくまゝ給ん
さへあるぞぞこゝろもへよけり





何かう段と。あさましき袖まさひてはいせうし
よろ心なれば。是こそ（小君）ともてうづきみてありく
（源ノ小君ヲ）思ひめしらせて。（源詞 きの守まで）昨日待くらしゝを（音を）。なほあひおもふまじ
きなめりとゑんじ給へば。（小君）かほうちあかめてゐたり。
（源詞）いづらとの給ふに。（小君詞）しかじかと申すに。（源詞）いふかひなれしや。
あさましとてまたもたまへり。あこはしらじな。その
伊与（いよ）のおきなよりはさきにみし人ぞ。されどたの
もしげなくくびほそしとて。ふつゝかなるうしろみ
まうけて。かくあなづり給ふなめり。さりともあこは我（わが）
子にてをあれよ。このたのもし人は。ゆくさきみじかく
はなんとのたまへば。（小君心）さもやありけん。いみじかりつ、

けることかれとしへるとおかしとおぼせ。これ子を
（源心）
まれいしのすてうちまもねてまいりなどしのふ。
わがれくしげ夜（どの）ののすて。さうぞくなどもをさせ給。
まことまおやめきてあれかひのれふまいつ○まる。
（宮録心）
されどこれこもいとおさるし。心よりほまちりも
をばかろぐしき名さへさりそへん。身のおぼしと
いとつきなるべくしへば。めでこさこともわが身
かしこそとおもひてうちとけしるれいへも罪し
ず。ほのかなりし。れけれひありき。ほいげまなべ
てまやいとしひ出さてぬまはあし○どおかし
きさ夜をしてまつりてもなかめはなる

べきなど。さひくすなりかり。君ハおぼしをとこる
時のまもなく。心ぐるしくも悲しくもおぼしいぼ。
おもへりし氣(けしき)などれいとおしさも。はるけん
りこゝろくおぼしわたる。かるぐしくくひまぎれ立(たち)
より給ひんも。人めたげかんさしろに。びんなさ
ゆるまひやあらはれん。人のこめもいとおしくと
おぼしわづらふ。思いのうち(内裏に)に日かずへのころさ
なべきうるのいとまちいでゝ。まはなまぐで
給まゐして。こちれ往ならおくしましろ。ぎの
みおどろきて。やり水の光いぼくとうしこまり
よろこぶ。こゝ君にはひるよりかくなむせひよれると

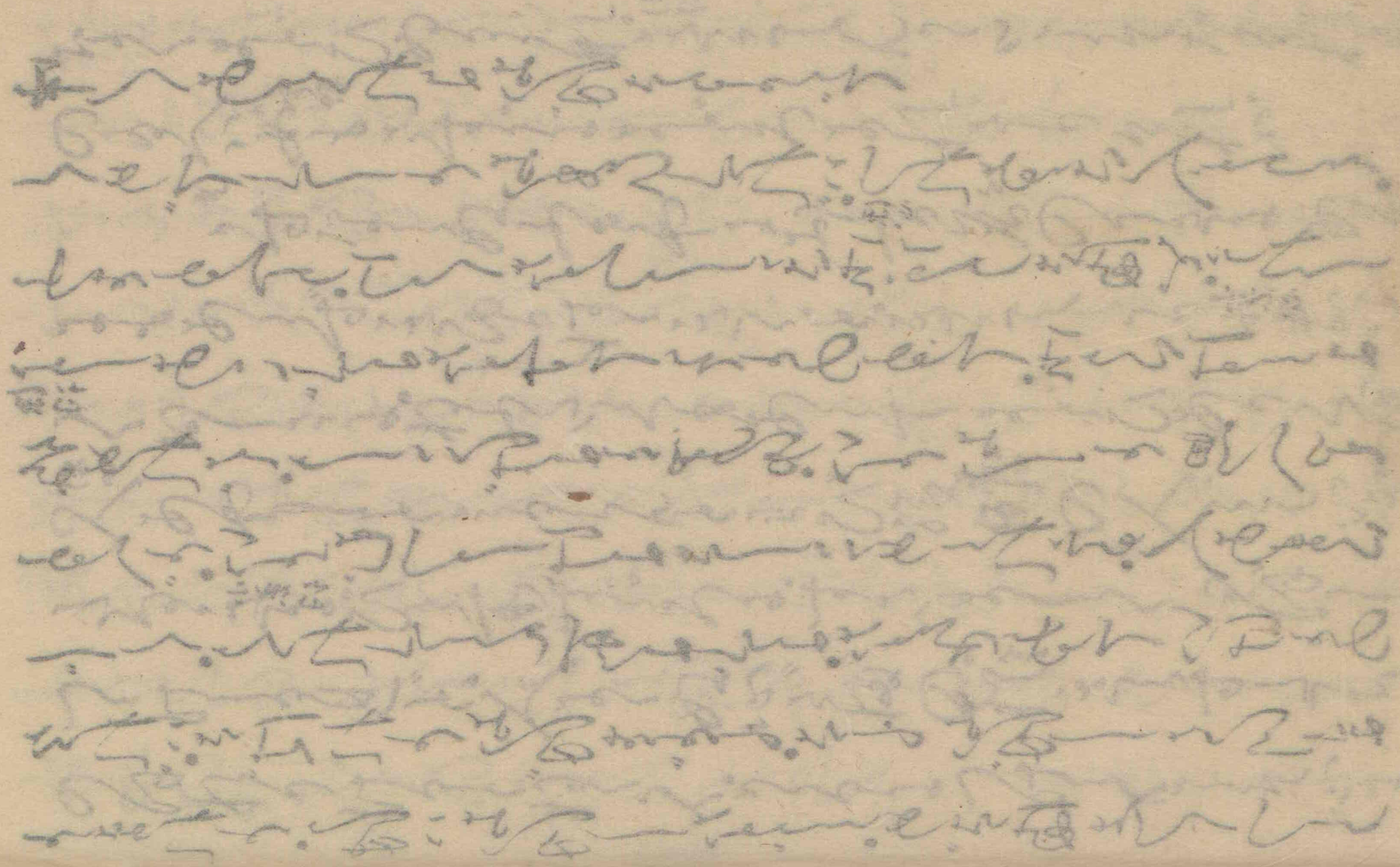
ののすひちぎりあけくれまいりてかしこにすれば
こゝろひもゝびけめしいでゝあり。めもきこゑもうそて
ありけるほどに。うばしたゞちつゝんほどは。おきくし
もとひなきれ○どきうとそうちきけ。人げるまさ
ありさ波どこてそてまつりても。おちきさたく夢の
やうすてすぎつしたゞけさいば。まゝるやくつハへんと
とひきふれて。たゞはさてまちつけ申しさきんとのま
ぎりゆきれいば。いでゝいめゆる行は。づゝけちうけ
れがりくけいつした。やましきれど。しのびて
うちしつうをたなどもきんは。ねどいだなれてとて。
わかき殿(どの)中将といひしがつかはる○しるしくれけり

うけろひぬ。さる（源心）心ちして人とくしげめて。はせう
そこあれど。小恵えるぞ。あいぎ。よろげの取もとめ
ありきて。けるぞ。あはわ。へる。うらうしてたどり
きたり。いと（小恵心）あさましくつしとしひていかるかひ
なしとおぼさんとなさぬぞりいへぞ。うくかし（安保詞）
かぬこころぞへつふもれ。おさるさ人のかる
こといひつふ。ふいこじくいむなもれとと
いひおどして。こちなやましれぞ。人ぞさけ
ず。とさへさせてなんとアルさせよ。あやしと（流れ）
もくしふんといひたるたて。心の中には。つゝ
うこれさぶまりぬるものおぼしなるぞ。すぞさよし

あやの花けくひとまれり其ゆゑ海さうまも
まちつけしてまつしば。おしうもやあらまし
しゐてせひしゐぬがなまゝけつもいかるほどしゐ
やうまおぼしらんと心ながらもしまいてさひ
がませひこゝろとてもかくても今はいふかひなさ
すくを成れば。むしんまつろづきるくてやみ
なんとせひくてたり。君(源心)はいかまゝばかりなさんと。
まぐおきるまきとうしろめてく待ふしまへるま。
小宮詞 ふのうなまりしとさこしれば。何(源心)さまりしくめづらか
なりける心のほどと。月もいとくづかしくこそあり
ぬれといとくおしきれ氣色なり。とぞかりもれ

もの給ぜ。うくうめさそうしとおぼしたり
はしきず（係）れ心をしらでそれにれたちまあや
なくまどひぬるれ。さてんかしこしてなれと（係詞）
のゐへば。ぬもさすがまどろまれざりそれば（宮録）
り（宮）ずなしぬふもやまおふる名（な）のうさまある
まもあらずさゆるはしさで。とさてしたり。ぶ君は
くおしさまねふこくもあらでまどひありく後。
人（係心）あやしとこうらんとおぼ。例（れい）の人ごそいざ
しるさまひと事すぐろますきまじくおぼし
つけしるほど。人まぬ心ざ後の。れ（なを）さてずしたち
のぼれりけるとねくうるまつけしこしそ心を

とまれとゝ。ほはおほしなげしめざ海をくつら
なれば。さばれとおぼをどもさもおぼしらけま
じくうくれこゝん。あまぶまたをゐていけとの
ゐへど。いと（小宗詞）むつしげまさしこゝめられる。人あまる
後めれば。うしこゝげまとゆゆいとおしと思へ。
よ（添詞）しあこぶまなすてそとのゐて。れうはしま
みをゐへり。けくなつしされ。けりさ海とうれし（小宗心）
くめでしこしとおもひられば。つれ（添心）ゐさ人よりも。
中くあられまおぼさるとぞ



69032
4 AP78